OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	意訳地名「牛津」「剣橋」の発生と消長
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2015, 55, p. 81-137
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55438
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

意訳地名「牛津」「剣橋」の発生と消長

田野村　忠温

1　はじめに

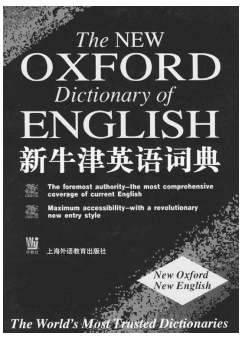

図1　中国の英語辞典

中国で出版されているOxford大学出版局の辞書・書籍の書名には図１に見るように「牛津」の２字が冠せられている。中国語に通じていない筆者は北京の書店で初めてそうした辞書を目にしたとき新奇の感覚にとらわれたが、しかし、これがOxfordの翻訳であるらしいことはすぐに分かるので、さすがに漢字の国は発想が違うと感心したものである。これがCambridge大学であれば「剣橋」という表示になる。こちらは「橋」だけが翻訳で、「剣」はCamの部分――ケム川（the River Cam）の名――の発音を写している。中国語における外来固有名詞の翻訳は地名にとどまらず、例えばSupermanは「超人」、Volkswagenは「大衆汽車」（中国語の「汽車」は自動車）、Apple Computerは「蘋果電脳」（「蘋果」はリンゴ）、Microsoftは「微軟」と訳される。本稿では日本語、中国語とも原則として現代日本の漢字字体で表記する。

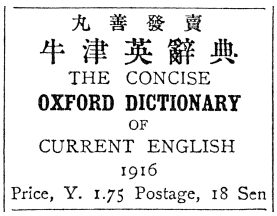
丸善發賣
牛津英辭典
THE CONCISE
OXFORD DICTIONARY
OF
CURRENT ENGLISH
1916
Price, Y. 1.75 Postage, 18 Sen

図2　日本の新聞広告

しかし、考えてみれば、日本語にも「太平洋」や「真珠湾」のような翻訳による地名がある。「牛津」と「剣橋」もかつては日本でも使われていたらしい。図２は1917（大正6）年2月5日の『東京朝日新聞』に掲載された丸善の洋書広告である。

「牛津」「剣橋」という翻訳による地名はいつどこで誰によって作られたのか。この問題に関しては、中国語を専門とする荒川清秀、千葉謙悟の各氏による論考がある。本稿はそれらを読んだことをきっかけとして、筆者なりに両地名の使用状況を各種の資料によってあらためて調査し、その発生と消長を探ってみようとするものである。

問題の性質上、考察は調査によって見出せた限りの用例と得られた限りの情報に基づいて事実を推定するという方法で進めざるを得ない。しかし、ここでは筆者の考える「牛津」「剣橋」の歴史をあえて少々確定的な形で述べることにする。それは一貫したストーリーを描いてみたいからであり、また、慎重な言い回しの多用により記述がくどくなるのを避けるため

でもあるが、明確な記述とすることには誤りの認定とそれに基づく訂正が容易になるという利点もある。本来必要な「調査の限りでは～」とか「～という可能性がある」といった表現が随所に省かれているものと理解されたい。

なお、「牛津」「剣橋」という表記の普及が遅く、音訳に用いられる漢字にも違いのあった英国外の地名としてのOxford、Cambridgeは考察の対象から外す。また、用例の年は、執筆された年の分かる場合は執筆年、分からない場合は刊行年に基づいて示す。

2　先行研究と予備的考察

筆者の調査に基づく議論に入る前に、「牛津」「剣橋」に関する荒川、千葉各氏ほかの見解を簡単にまとめ、その問題点を確認するとともに、意訳の用語・概念に関する予備的な考察を行う。

2.1　従来の説

荒川(2000b)は、「牛津」「剣橋」その他の「意訳地名」の問題を正面から取り上げ、用例の観察に基づいて論じた最初の論考である。荒川によれば、日本と中国いずれの資料においても20世紀の初頭まで「牛津」「剣橋」の使用は見られず、中国資料ではもっぱら「阿斯仏」「阿哥斯仏爾」、「堪比日」「岡比黎日」といった「音訳地名」、日本資料では片仮名表記か中国式の音訳地名が使われていた。そして、「牛津」「剣橋」の用例は、早くは中国資料では1904年、日本資料では1915年に見られるとされる。荒川は、これらの意訳地名の考案に際しては複合的な表現を要素ごとに直訳してその訳語を作り出す翻訳借用（loan translation, calque）の伝統をふまえた西洋人宣教師の関与があった可能性を指摘し、しかし、同様の慣習は日本の蘭学にもあったので日本人による考案の可能性も否定できないとしている。

千葉(2003, 2006, 2010)は、「牛津」の初出が19世紀末にさかのぼり、『万国公報』1893年2月号に掲載された翻訳記事に用例が見出されることを報告している。そして、日清戦争（1894～1895年）以前は中国から日本への留学が少ないことから「牛津」の表記が日本から中国に伝わったとは考えにくいとし、また、中国人が西洋人宣教師の文章を筆記・修正する役割を担っていたことを述べ、結論として「牛津」は中国人の考案によるものである可能性が高いと論じている。

荒川、千葉各氏の論考以外に「牛津」「剣橋」の起源に言及した研究は多くない。筆者の目に止まったものとしては、「牛津」「剣橋」を日本人の考案によるものとする古田他(1965)がある。ここでは明治初年における漢語の流行について述べる中で、“漢学者たちが、外来文物の摂取にはたした役割を重視しなければならない”とし、「牛津」「剣橋」という翻訳を“江

戸の習慣を明治になって踏襲した”もの、“なんでもかんでも、ただ漢字で書かなければがまんをしなかった、いまからは想像しがたいような風潮”の中で行われたものとして位置付けている。また、樺島(1985)は、日本人が古代に「橋」という漢字にハシの訓を与えたのと同じように近代にはブリッジの読みを与え、それが「剣橋」という表記を可能にしたという趣旨のことを述べている。ほかに、研究書ではないが、外山(2003)は、“漢学の素養、学識をもった英学者たち”が「牛津」「剣橋」を含む各種の２字漢語を翻訳によって作り出したと述べている。しかし、いずれの日本人考案説にも根拠は示されておらず、結論的に言えばそれぞれの著者が想像を断定しているに過ぎない。

2.2　問題点

荒川、千葉各氏の論述を読んで不安ないし不満を覚えることがいくつかあった。ここでその主な３点について述べる。

第１は、少数の用例に基づいて語の由来を論じることの危うさである。千葉の場合、中国資料に見出されたわずか１例の用例に依拠して論が組み立てられている。日本資料は調べられてもいない。

第２に、従来の研究では関心がもっぱら「牛津」「剣橋」の初出の局面に集中している。しかし、語の歴史において用例の初出はその一局面に過ぎない。しかも、圧倒的大多数の語において、その発生と初出は一致しない。それらの意訳地名の歴史のより深い理解を得るには、その発生から伝播、普及、衰退に至る過程全体の解明を試みる必要がある。

第３は、「牛津」「剣橋」という地名の特性に関わることである。OxfordとCambridgeは地名とは言っても、言わば汎用性の高い海洋や山河、国や大都市などの名前と異なり、英国の大学の所在地の名前に過ぎない。「牛津」「剣橋」は果たして一般的な地名と同列に扱えるのか。踏み込んで言えば、それらの意訳地名創出の背景には、考案者の当の大学に対する深い関わり、特別の思い入れがあるのではないか。ちなみに、Oxfordにならえば Stanfordは「石津」と訳すことができるが、実際には翻訳されず、中国語でも「斯坦福德」ないし「斯坦福」と音訳される。

古田他(1965)の、「牛津」や「剣橋」の表記は何もかも漢字で書かなければ気がすまないという明治初年の風潮の中で生み出されたという見方は、かりにそこに真実の要素が含まれるとしても、両意訳地名発生の有効な説明にはならない。漢字使用の流行という単純な視点では、意訳名を与えられた大学が英国の２大学に限られるという事実に解釈を与えることができないからである。しかも、そもそも単に漢字で書くことが目的であるのなら、それは既存の音訳表記によってすでに達成されており、新たに意訳地名を案出するまでもなかった。また、樺島(1985)の漢字の読みの観点からの説明は、Cambridgeが「剣橋」と書かれケンブリッ

ジと読まれるという事実をただ言い換えただけのものである。複合語を構成する単漢字への外来語音の読みの付与という類例の乏しい現象を一般性の高い訓の現象になぞらえてみたところで、「剣橋」に関する理解が深まることはない。

2.3 意訳地名の下位類

以上のことを念頭に置いて本題に進む前に、本稿での論述の前提として、意訳の用語・概念に関して若干の考察を述べる。

「牛津」「剣橋」のような語を荒川は意訳地名、千葉は翻訳借用地名と呼ぶ。本稿では荒川の用語に従う。これは、「意訳」のほうが簡潔で、かつ、「阿斯仏」「堪比日」などの音訳との対比を明瞭に表せることによる。ただし、「意訳」と「翻訳借用」は等価ではなく、すぐ下で見る通りその指す範囲も異なる。

意訳地名は２つの観点からさらに下位区分することができる。

第１に、外来語の音訳対意訳という二分法は中国における伝統的な見方であるが、日本語における意訳地名を考える際には中国語では問題とならない点に関してさらに下位区分が必要である。例えば「真珠湾」は漢字音によってシンジュワンと読まれるが、「牛津」はそのように書かれても通常ギュウシンと読まれるわけではなく、発音はオックスフォードという外来語音のままである。つまり、「真珠湾」においては――そして中国語の「牛津（ニウチン）」でも――表記と発音の両面に関して翻訳・変換が行われているのに対し、「牛津」の翻訳は日本語ではもっぱら表記の面にとどまる。

日本語の「牛津」のようなものを本稿では半面意訳地名、縮めて「半意訳地名」と呼ぶ。荒川は「剣橋」のような音訳と意訳の組合せを半意訳と形容するが、ここではそうしたものは「部分意訳」と呼ぶことにする。

第２に、「意訳」には２通りの意味がある。すなわち、「意訳」は「直訳」の対概念でもある。と言うよりも、一般の日本語においては「意訳」はそもそもそうした意味しか持たない。音訳と対を成す広義の意訳を意訳$_1$、そのうちで直訳と対を成すものを意訳$_2$と表記するとすれば、意訳$_1$地名の多くは直訳的であるが――この直訳的な意訳$_1$が翻訳借用に相当する――、まれに意訳$_2$的と考え得るものもある。例えば、ロンドン中心部東寄りのCity (of London)を内田正雄編訳『輿地誌略』(1871)は読者の便のためと断って「東坊」という訳語によって表記し、シテーの読みを与えている。これは意訳$_2$的な（半）意訳$_1$地名と考えることができる。もっとも、このような例は多くはない。意訳$_2$的な意訳$_1$地名と見得るもので普及した地名としては、San Franciscoを表す中国語の「金山」があり、現在では「旧金山」の形で音訳地名「三藩市」や部分意訳地名「聖弗朗西斯科」と並んで広く用いられている。[1]

[1] 意訳$_2$的な意訳$_1$語は、羅(1950)の「描写詞」、潘(1989)の「吸収外来概念還使用旧詞翻新的辦法」によ

外来地名は細かく見ていけばさらに多様であるが、本稿の目的にとっては意訳に関する以上の確認で十分である。

3 「牛津」

これより筆者の調査と分析に基づく意訳地名「牛津」と「剣橋」の歴史の記述に入る。[2] 以下で見る通り、両地名は発生・普及の時期に明確なずれがあり、同列に論じることができない。この３節では主として日本資料――本稿では日本人、中国人を書き手とする資料をそれぞれ日本資料、中国資料と呼ぶ――に見出される用例に基づいて「牛津」の発生と消長の様相を考察する。「剣橋」については次の４節で検討する。中国資料における「牛津」と「剣橋」の使用状況は日本資料の検討の後に取り上げる。

3.1 「牛津」以前

明治初年の日本資料に現れる地名Oxfordはその大半が片仮名表記か中国式の音訳地名のいずれかである。ほかに平仮名で書かれたものや英語綴りによる表記が見られることもあるが稀である。

意訳地名以前のこの時期の状況に関する詳しい記述は省く。片仮名表記について最低限のことを記せば、「オックスフォード」以外にも「オクスホルド」「オキスフォルド」「オキシホール」といったさまざまな表記が見られる。複数の要素からの択一を｛｜｝、要素の省略可能を（　）で示すことにすれば、大多数の片仮名表記は次のパターンに集約することができる。小仮名は大書されることもある。

｛オ／ヲ／ア｝(ッ)｛クス／キシ／キス｝｛フォ／ホ｝｛ール／ード／ルド｝

中国式の音訳地名は基本的に中国で刊行された地理書の類の表記を引き写したものである。これについても「阿斯福」「阿斯仏」「疴哥斯仏爾」など複数の表記が見られる。ヂヨン・マレイ著・丹羽純一郎訳『英国竜動新繁昌記』(1978)――「竜動」はロンドンの古い音訳表記

る翻訳語、楊(2007)の「根拠外語詞的意義採取“重新命名”的方法構造的新詞」などの概念に一致ないし近似する。直訳的な意訳1語は本文で述べた通り翻訳借用に相当し、羅(1950)では「借訳詞」、王(1958)では「摹借詞」、近年の中国語の外来語研究ではしばしば「倣訳詞」と呼ばれている。

[2]「牛津」は一般に意訳地名と見なされ、ここでもその慣例に従うが、実はその見方には不正確な面がある。Ackermann(1814)によれば、Oxfordの第１音節は実のところ牛を表すoxではなく、語形の似た固有名詞に由来している――すなわち、Oxfordは民間語源によって生まれた語形に過ぎない――可能性が高い。とすれば、「牛津」は真正な意味での意訳地名ではなく、単に“意訳のつもりで作られた地名”、“意訳地名もどきの地名”であることになる。

――には「乙屈保土」「乙屈保」という表記が見られるが、これは中国語からの借用ではなく訳者の考案によるものであろう。[3]

3.2 「牛津」の発生　ジェームズ・レッグ――1875～1877（明治8～10）年ごろ

さて、「牛津」という意訳地名が生まれた場所は、日本でもなければ中国でもない。「牛津」は英国の地において考案された。考案者は英国人、Oxford大学の中国学教授ジェームズ・レッグ（James Legge、1815～1897）である。

レッグはロンドン伝道会（The London Missionary Society）がマレーシアのマラッカに開設した英華学院（The Anglo-Chinese College）――アヘン戦争後の1843年には香港に移転――の第７代校長を1840年から1858年にかけて務めた宣教師（中国名は理雅各[4]）で、帰国後はOxford大学に1876年に新設された中国学講座の初代教授に任ぜられた人物である。レッグは香港在任時より四書五経を始めとする中国の古典多数を英訳して出版している。

「牛津」の考案者がレッグであることは、南条文雄（ぶんゆう）――詳しくは次の3.3で述べる――がその師マックス・ミュラーに関わる回想を述べた文章の中で「因みにオクス、フオルドと云地名を牛津と義訳したのはレツグ博士でありた」と述べていることから知られる（南条(1901)）。これが「牛津」の起源に関わる唯一の証言・証拠であるが、その信頼性は高い。英国人が意訳地名「牛津」を考案しても、漢字を使わない英国の社会でそれが普及することはあり得ない。「牛津」がその後日中両国の社会に普及したのは、3.3以下で見るように、ひとえに南条の存在にかかっているのである。「牛津」は結果的に考案と普及に関してレッグと南条による分業が行われたことになる。

レッグが「牛津」を考案した時期は1875～1877（明治8～10）年ないしその前後であったと推定される。この期間の上限（1875年）は、レッグは1876年にOxford大学に教授の職を与えられることを早くから予期してはいなかった――同大学には中国研究の講座がなかったし、レッグの宗派に関わる理由もあった――こと（Girardot(2002)）、下限（1877年）は、3.3で見る通り1878年3月の資料に「牛津」の初出例が見出されることに基づく。レッグはミュラーらの高い評価を得てOxford大学の教授に任ぜられる前年の1875年には同大学からフェローの身分を与えられている。「牛津」の考案は、レッグのOxford大学との関わりが深まり始めたときから教授として着任した直後にかけての約３年の期間のうちになされたものと思われる。[5]

---

3 同書にはほかにも「伊勢屈（イセクス）」(Essex)、「千登保留（セントポール）」（Saint Paul）、「鄭水街（テイムススツリト）」（Thames Street）など日本語における漢字の読みに基づく表記が多数見られる（「鄭」は実際にはさんずいの付いた字形で記されている）。

4 「雅各」は「ジェームズ」のヘブライ語起源に近い語形「ヤコブ」の音訳である。

5 上海で西洋人宣教師の翻訳出版に協力し、太平天国の乱（1851～1864年）の時期には香港に逃れてレッ

「牛津」考案の具体的な場所はロンドンかOxfordのいずれかであった可能性が高い。考案の時期がレッグのOxfordへの転居（1876年）より早かったとすればロンドンで――レッグは1873年の帰国以後郷里のスコットランドに住んでいたが、Oxford大学への着任の可能性が生じたのを受けて1875年にロンドンに移っている（Girardot(2002)）――、Oxford転居後であったとすればOxfordで考案されたと考えるのが自然である。

3.3　第１期　南条文雄・笠原研寿の個人領域での使用――1878～1888（明治11～21）年

南条文雄（1849～1927、字碩果）は、1876（明治9）年にサンスクリット仏典研究の振興を図る東本願寺によって笠原研寿（1852～1883、同僧墨）とともに英国に派遣された僧侶である。英語の知識もなく英国に渡った２人はまずロンドンで英語を学んだ後、1879年にOxfordに移り、Oxford大学の著名な言語学者・東洋学者フリードリヒ・マックス・ミュラー（Friedrich Max Müller、1823～1900）からサンスクリット語、サンスクリット仏典に関して個人教授を受ける。笠原は肺結核を発病して1882年に帰国し、翌年に31歳の生涯を閉じる。南条は７年半の英国滞在の後帰国し、東京帝国大学初代梵語学嘱託講師、真宗大谷大学（現大谷大学）学長などを歴任する。

「牛津」の初出例は、南条と笠原が渡英３年目、Oxfordに移る前年の1878（明治11）年にロンドンから日本の知人に書き送った書簡に見出される。この書簡は、笠原の没後南条の編集によって刊行された『僧墨遺稿』(1885)に「寄郷友書」の１通として収められている。『僧墨遺稿』では書簡の差出人名の部分が省かれているが、文面から連名の書簡であったことが分かる。原文は句点をほとんど含まないが、見やすさのために適宜句点を補って示す。[6]

> 扨私共モ今暫クセバソロ〳〵「サンスクリツト」語学ヲ始メ度候得共好師ニ乏シ。字引モ文典モアレドモ皆不十分ナリ。倫敦大学校ニハ「サンスクリツト」学科ハアレドモ学ブ者今ノ処（ママ）テハナシ。牛津（オクスフヲルド）大学校ニハ比較語言学博士マクス、ムユーラル氏モ居リ学ブ者モアル由。独逸国ニハ「サンスクリツト」語文学ハ英国ヨリハ開ケ居ル由ナリ。マクス、ムユーラル氏モ独逸人ナリ。　（南条・笠原書簡、1878年3月6日）

「牛津」に添えられた振り仮名は『僧墨遺稿』への収録に際して加えられたものである可

グの古典翻訳に助力した王韜（1828～1897）は、1867年から1870年にかけて一時帰国したレッグの招きにより英国を訪問し、1868年にはレッグの案内でOxford大学を訪れて中英両国の交流に関する講演を中国語で行った。王韜は『漫遊随録』中のそのことを述べた箇所においてOxfordを「哈斯仏」と記している。この音訳地名の使用は、当時レッグがまだ「牛津」という意訳地名を考案していなかった――慎重に表現すれば、少なくともそれを常用していなかった――ことを証明する。

6　以後の挙例においても必要に応じて句読点を中心とする形式上の微調整を施す。

能性が高い。[7]

この1878年の時点では南条はまだレッグに会っていない。Legge(1893)および南条(1901)の記述を総合すれば、南条がミュラーの紹介によってレッグを初めて訪問したのは1881年ごろのことである。したがって、南条は意訳地名「牛津」をレッグから直接に教えられたわけではなく、サンスクリット語学習開始に向けた活動を行う中で[8]第三者を通じて知ったことになる。

初出例に次ぐ用例は、翌1879年、南条が２月下旬に笠原より一足先にOxfordに移ったその直後に日本に書き送られ、同じく『僧墨遺稿』に収められた書簡に現れる。これも文面から考えて連名の書簡である。

> 本月上旬文雄ハ牛津（オクスフヲルド）ニ到リマクス、ムユーラル氏ニ面会シ梵語伝習ノ事ヲ依頼セシニ、同氏モ仏教僧徒ノ「サンスクリツト」ヲ学バントスルハ至当ノコトナレバ何分ニモ力ノ及ブ丈ハ世話致スベシ、三年間勉強セバ随分ノ梵学者ニ仕立テ、見セルト日本公使ニモ話セ[9]ト云ヒ居ラレタリ。（南条・笠原書簡、1879年2月下旬）
>
> 当地留学生ノ演説ハ追々盛ニ相成リ二月ヨリハ文雄同会ノ書記ニ撰バレタレドモ其次会ニ於テ之ヲ辞セリ。此ハ牛津ニ移レル故ナリ。（同上）

この時期の南条らの書簡にはときにOxfordの音訳地名や片仮名表記も現れる。読み手や文脈などに応じて表記が使い分けられたという可能性もあるが、限られた用例に基づいて確たることは言えない。

「牛津」は南条がOxford在住中に詠んだ漢詩中にも見出される。

> 四歳在牛津。児童笑語親。甘為異邦客。猶記故郷春。境僻既忘世。身全能慣貧。兄書獲吾意。未肯説酸辛。（南条文雄「次北方心泉寄懐詩韻」(1883)、『航西詩稿』(1893)所収）
>
> 憶母一朝先我帰。舟車万里似鵬飛。送君十月牛津上。寒雨霏々打客衣。
>
> （南条文雄「送黒崎某帰日本」(1883)、『航西詩稿』(1893)所収）

---

7 大谷大学の博物館および図書館に所蔵されている南条、笠原の書簡10通余りを同大学のご好意により閲覧させていただいた。それらの書簡の限りでは、後年出版物に収められた書簡に見られる振り仮名はほとんど使われていない。1878年の書簡は未見である。

8 南条と笠原は、「ロンドンに着いた早々から誰に遇つてもこの事【＝渡英の目的がサンスクリット語の学習であること】を話して、適当な先生の紹介を頼んでゐた」（南条(1927)）。

9 ミュラーが「日本公使にも話せ」と言ったのは、南条と笠原のサンスクリット語学習の希望がミュラーに伝えられる過程に駐英公使上野景範（かげのり）の仲介があったことを背景としている（南条(1924,1927)など）。

以上の例を含む初期の用例はすべて書簡ないし漢詩という個人的な文脈で書かれたものであった。南条と笠原以外の書き手による用例としては、菅了法（すげりょうほう）が1883年に笠原の死を悼んで詠んだ漢詩（『僧墨遺稿』(1885)所収）が調査において確認できた唯一のものである。菅は1882年に東本願寺より英国に派遣され、同年に帰国した笠原と入れ替わる形で南条と同居していた人物である（南条(1924, 1927)）。

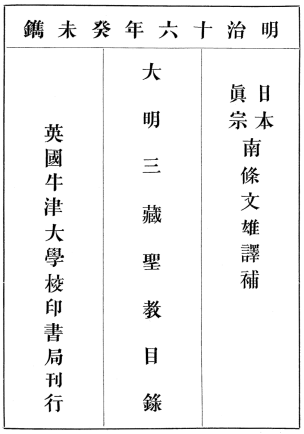

図3 「牛津」の出版初出

不特定多数の、しかも、全世界の読者の目に触れることになる出版物に意訳地名「牛津」が初めて出現するのは1883（明治16）年のことである。同年4月に南条がミュラーとレッグの助力のもとにOxford大学出版局（クラレンドンプレス）から刊行した漢訳仏典の目録Bunyiu Nanjio[10] *A Catalogue of the Chinese Translation of the Buddhist Tripiṭaka: The Sacred Canon of the Buddhists in China and Japan*（『大明三蔵聖教目録』）――明代に刊行された『大明三蔵聖教目録』に基づき、各仏典についてサンスクリット原典の名を復元し、訳者名、翻訳年、内容の解説などを英語で記したもの――の英文扉の前に置かれた日本語（漢文）扉（図３）に「英国牛津大学校印書局刊行」という表示の形でそれは現れる。[11] この日本語扉の挿入は、日々学習・研究に専心し、渡英後わずか数年にして同目録を完成させた南条に対するミュラーの祝意の表現であったろう。[12] 南条は翌年帰国直前にこれに基づいてOxford大学より名誉学位を授けられている。この目録は'Nanjio's Catalogue'、「南条カタログ」の名で今も広く知られ、利用されている。[13]

---

10 このBunyiu Nanjioという一見奇妙なローマ字表記は、南条の渡英時にロンドン在住の日本人が注文して作ってくれた名刺に印刷されていたもので、南条は以後その表記を使い続けた（南条(1927)）。南条は名刺を見てその表記にショックを覚えたかのように述懐しているが、この表記はむしろ英国人に名前の発音を最も正確に伝えるために積極的に選ばれたものであったと思われる。実際、ミュラーがMüller(1881)その他で用いている日本語のローマ字表記も全体的にこれに非常に近い。

11 この書籍の刊行に関してミュラーの強力な支援があったことは自明であるが、南条(1901, 1924, 1927)などにその旨が繰り返し述べられている。また、1883年2月22日の*The Times*紙に掲載された'University intelligence'の記事――Müller(1884)所収の南条の自伝（'A short account of the life of Bunyiu Nanjio, by himself (1849-1884)'）中に引用された*Saturday Review*紙の記事もほぼ同内容――から、漢字の活字の手配に関してレッグの協力があったことが知られる。

12 ミュラーは1883年9月25日の*The Times*紙に寄稿した笠原追悼文で、笠原と南条は当初来英の目的すら満足に説明できず、その後の進歩も遅々としていたので望みは持てないと思うこともあったが、２人は不屈の努力によって成功を収めたと述べている。

13 現在国内外の各所の図書館に所蔵されている同目録は書誌情報に1883年の刊行と記されていても実際にはその大半が南条没後の1929年に日本で刊行された影印本である。しかし、影印本では日本語扉が1883年の初刊本にもあったかどうか確実なことが分からない。本稿の調査においては1883年に英国で出版された原刊本に基づいて日本語扉の存在を確認した。

同年5月には南条はミュラーとの共著においてサンスクリット仏典の注釈・翻訳書F. Max Müller and Bunyiu Nanjio *Sukhâvatî-vyûha: Description of Sukhâvatî, the Land of Bliss*（『仏説無量寿経梵文』）を出版する。ここでは日本語扉に「英国牛津格老廉敦印書局刊行」との表示がある。「格老廉敦」はクラレンドンの音訳である。

1886年にはレッグが『高僧法顕伝』（別名『仏国記』）の翻訳書James Legge(tr.) *A Record of Buddhistic Kingdoms, Being an Account by the Chinese Monk Fâ-Hien of his Travels in India and Ceylon (A.D. 399-414) in Search of the Buddhist Books of Discipline*をやはりOxford大学出版局から刊行する。その巻末に帰国後の南条がレッグに送付・提供した漢文テキスト『沙門法顕自記遊天竺事』が付載され、その扉に「英国牛津大学校印書局刊著(ママ)」との表示がある。これが「牛津」の考案者自身の著作物における用例として確認することのできた唯一のものである。[14]

もっとも、これらは英文書で、しかも、専門性が高いということもあり、追加的に挿入された日本語扉や付録の扉における出版社名の表示が「牛津」という意訳地名を広める直接的な役割を果たすことはあまりなかったと思われる。

日本国内の出版物における「牛津」の初出は翌1884（明治17）年、南条の帰国から約４か月後のことである。『令知会雑誌』第6号、第7号に掲載された南条の漢詩のうち３首に用例が見出される。『令知会雑誌』は浄土真宗本願寺派、真宗大谷派の僧侶らの結成した組織「令知会」の機関誌である。

それらの漢詩はいずれも南条が同年に米国を経由して帰国する際に太平洋上で詠まれたものである。ここには２首の各一節を示す。詩題中の「亜児碧(アラビック)」は船名である。

> 竜城風雪牛津雨。夙夜孜々伴図籍。良師好友到処多。時月相逢亦求益。
>
> （南条文雄「亜児碧(アラビック)行」(1884)、『令知会雑誌』第6号(1884)所収）
>
> 不若作書誘童蒙。梵漢和文称合璧。笠子与我同此志。竜城牛津読梵冊。
>
> （南条文雄「三畳亜児碧行之韻」(1884)、『令知会雑誌』第7号(1884)所収）

国内出版物における初出であるにもかかわらず、「牛津」の読みが示されていないのは少なくとも現代の目で見れば意外なことである。[15]

---

14 レッグによる「牛津」の使用例を挙げる場所がほかにないのでここに記したが、この書籍は日本資料ではなく英国資料である。なお、レッグの書き残した文書や書簡を調査すれば「牛津」の初出が1878年3月の南条・笠原の書簡以前にさかのぼる可能性がある。

15 これは漢詩の文脈であるために振り仮名が省かれたということではない。詩題では「亜児碧(アラビック)」と振り仮名が添えられているし、『令知会雑誌』第8号(1884)に掲載された漢詩では本文にサンフランシスコのsea lion（アシカ）を表す「海中獅子(シーラヨン)」という表現が振り仮名付きの形で出て来る。

同1884年の『令知会雑誌』第8号、第9号に載った南条の論文・記事では「牛津」が日本語の文脈に現れる。第9号の例に至って初めて振り仮名が加えられている。

明治十三年ノ冬亡友笠原研寿子余ト同ク英国牛津ニ在リ仏涅槃年代考一篇ヲ草シ
（南条文雄「仏涅槃年代考第二」『令知会雑誌』第8号(1884)）

十三年九月余倫敦ニ在リ日々印度省書籍館ニ行キ其所有タル本邦黄檗版ノ大蔵経[16]ヲ閲読シ増補英訳大明三蔵聖教目録ヲ草セシヲ去年二月牛津大学校印書局ニ於テ刊行セシコトアリ。（同上）

今年一月尽日余英ノ牛津ニ在リテ之ヲ英語ニ訳シ博士マクスムユーラル氏ニ示セシニ同氏ハ之ヲ一雑誌ニ投ゼシコトアリ。（同上）

金剛経ノ梵本（中略）我明治十四年牛津（オクスフオルド）府ニ於テ刊行ス。
（南条文雄「欧洲梵語学略史」『令知会雑誌』第9号(1884)）

この後の出版物に現れる「牛津」の例をいくつか示す。以後、用例中の【 】内は筆者による補足である。

明治十四年六月博士馬格師摩勒【＝Max Müller】氏笠原と余とを携へて牛津を去り
（エフ・マクス・ミユーラル「笠原研寿」『教学論集』第5編(1884)、南条文雄付記）

明治十二年二月の末に同府【＝ロンドン】を去り西北六十英里に在る牛津（おくすふおるど）府に到り専ら梵語文学を学習す。（南条文雄『問対雑記』(1886)）

英国牛津大学校ニ属スル「クラレンドン」印書局ハ其新刊ノ梵本ヲ余ニ送致セリ。
（南条文雄「新書籍英清ヨリ来ル」『令知会雑誌』第23号(1886)）

此ノ書ハ著者自ラ本文ノ始ニ述ルカ如ク英国牛津ノ梵学博士マクス、ムユーラル氏（中略）カフランシス、バルハム【＝Francis Barham】氏ノ駁論ニ対ヘテ新聞紙ニ投載シタル者ニシテ（馬格師摩勒著・南条文雄閲・加藤正廓訳『涅槃義』(1886)）

明治十四年八月英国牛津ニ在テ書ス。
（笠原研寿「達摩波陀ノ事」『教学論集』第33編(1886)、論文表題への添え書き[17]）

---

16 日本政府が岩倉具視の提言に基づいて1875（明治8）年に英国に寄贈し、ロンドンのインド省（The India Office）図書館に収蔵された2,000巻を超す黄檗版大蔵経を指す（Beal(1876)）。南条はそれを調査して南条カタログを作成した。

17 この添え書きは笠原の遺稿を雑誌に収載するに際して別の人間、おそらく南条が書き加えたものである。「明治十四年」すなわち1881年に書かれた笠原の遺稿ではOxfordは片仮名で「オクスフオルド」と記されている。

Nanjio(1883)以後の南条の著作にOxfordは安定的に「牛津」の形で現れる。研究書や『令知会雑誌』『教学論集』を中心とする関係の雑誌に掲載された論文･記事のほか、紀行文『印度紀行』(1887)、漢詩文集『航西詩稿』(1893)、そして、南条の没後に編集刊行された『碩果詩草』(1937)、『南条先生遺芳』(1942)に収められた書簡や漢詩文などに多数の用例が見出される。もっとも、ときに例外はあり、例えば南条が早稲田大学の前身である東京専門学校で「仏教史節要」と題して行った講義の筆記録（刊行年不明）と『令知会雑誌』第18号(1885)、同第26号(1886)に掲載された記事に片仮名表記、『教学論集』第8編(1884)と『東洋哲学』第5編第3号(1898)に掲載された記事に音訳地名「阿斯弗」「阿斯仏」が現れる。口頭語の文体で記された講義録「仏教史節要」における片仮名表記は筆記者によるものである可能性が高いが、その他の場合における異表記の選択の理由は不明である。[18]

「牛津」への振り仮名の付加の問題にはすでに２度触れたが、個々の用例におけるルビの有無に説明を与えることは困難である。「牛津」が同一の文章に複数回出て来るとき最初の箇所でルビが添えられやすいことは言うまでもないが、ルビの有無は多分に偶然の要素に支配されていると見られる。また、「牛津」の初出例を含む書簡のところで述べたように、ルビはそもそも少なからぬ場合において書籍・雑誌の編集の段階で加えられたものと思われる。こうした事情は後の時期の用例についても共通である。

1887（明治20）年までの「牛津」の用例はほとんどもっぱら南条文雄と笠原研寿の著作物に現れる。調査で確認できた例外としては、菅の漢詩とレッグによる英文書の付録の扉のほかには、『令知会雑誌』に掲載された記事３件があるだけである。1888年に刊行された荻原善太郎『日本博士全伝』の「文学博士南条文雄君小伝」にも「牛津」が出て来るが、南条の提供した情報に基づいて執筆されたものと思われる。「牛津」の初出例の確認された1878（明治11）年から1888（明治21）年までの11年間を日本における意訳地名「牛津」使用の第１期とする。第１期を二分するとすれば、出版物に用例の現れる1883（明治16）年が後半の開始年ということになる。

3.4　第２期　学術界全般への使用拡大――1889～1899（明治22～32）年

続く第２期においては、「牛津」の使用が南条と笠原からほかの学術の世界に広がる。それは当然、Oxford大学に学んでいた人間、あるいは、少なくとも英国、欧州の学問に深い関心を寄せていた人間を通じてのことだったであろう。

---

18 本文に述べた事実の限りでは、音訳地名は『令知会雑誌』以外の雑誌にのみ現れ、したがって、雑誌の種類によって表記が使い分けられたかのようにも見える。しかし、『教学論集』や『東洋哲学』でも別の号の記事には「牛津」が使われており、雑誌の種類と表記の使い分けのあいだに単純な相関は認められない。

第２期の一般学術出版物における「牛津」の初出例は『法学協会雑誌』に見られる。

在英会員植村学士牛津に遊はれたる節該論文一部を見出され
（「牛津大学懸賞論文」『法学協会雑誌』第65号(1889)）

その後の用例には以下のようなものがある。最初の例は、一般学術出版物とは言っても、内容は南条に関わるものである。

此書ハ南条文雄氏ガ英国牛津大学校印書局ニ於テ得ラレタル[19]モノナルヲ明治十八年始メテ本邦ニテ刊行シタルモノナリ。
（「教育家秘蔵品蒐集会陳列品説明」『教育時論』第187号付録(1890)）

千八百九十一年五月牛津に於て　エ、ヴィ、ダイシー
（深井英五訳『英米仏比較憲法論』(1893)[20]、英訳の序）

其一部分は、既に昨年十一月牛津のクラレンドン商社より出版し、猶続々出版せられつゝありといふ。　（「欧州近世歴史地図の出版」『史学雑誌』第8編第6号(1897)）

牛津大学のグレンフエル、ハントの二氏、（中略）昔オクシュリンヒヨスと呼べる旧址に、古物探掘を試みて、紀元一世紀乃至三世紀の古写本数多を発見したるなかに
（「基督の訓誡」『帝国文学』第3巻第9号(1897)）

ジヨウエ(ママ)ツトが入り来れる時の牛津は一の大学(ユニバーシチー)と云ふよりも、寧ろカレツヂの集れる市町とも云ふべく、各々其特異の光彩を放ちて
（安知生「牛津の哲人、ジヨウエツト」『世界之日本』第26号(1898)）

法王クレメント五世は欧州の四大学、巴里、ボローギヤ、サラマンカ、牛津に希伯来【＝ヘブライ】、亜剌比亜語の二講座を置きて
（金沢庄三郎「言語学小史」『国学院雑誌』第4巻第10号(1898)）

Oxford大学と関係していても、学問には直接関係しない文脈での次のような用例も散見される。『国民之友』第62号の刊行は1889年9月で、上掲の『法学協会雑誌』の例よりもわずかに遅い。[21]

---

19 南条がOxford大学出版局で（「此書」に収められた梵文阿弥陀経を）“得た”というのは誤りで、実際には“刊行した”ということである。

20 この書籍は、エミール・ブーミーによる仏文書をエー・ヴィ・ダイシーが英訳し、それを深井英五が日本語に重訳したものである。

21『法学協会雑誌』第65号は刊行月が不詳であるが、号数と刊行年の対応から考えておそらく1889年の7月ないしその前後の刊行と見られる。

英国の大将ウオルスリー子爵は（中略）牛津大学生徒に向て（中略）演説をなせしや乍ち大なる輿論の非難を其の一身に来せり。（「武人の政談」『国民之友』第62号(1889)）

米国エール及ハヴアート両大学生大西洋を越えて英国賢橋及牛津大学生と体育の技を闘はす。（「かきよせ（十七）」『教育時論』第521号(1899)）

こうした使用が、続く第３期における「牛津」の一般社会への浸透につながっていく。２番目の例に含まれる「賢橋」は「剣橋」の異表記で、これについては後にあらためて取り上げる。

3.5　第３期　一般社会への浸透――1900～1945（明治33～昭和20）年

新聞における「牛津」の初期の使用例は1900（明治33）年10月29日に逝去したミュラーの訃報、追悼記事に見出される。文面を引用するほどの意味もないので記事名ほかを示すにとどめる。

高楠順次郎「マクス、ミユラー博士の一生」『読売新聞』1900年11月10日

「明治三十三年紀（第十）宗教篇」『東京朝日新聞』1901年1月10日

高楠順次郎は南条の帰国後英国に渡ってOxford大学の正規の課程で学ぶとともにミュラーの個人指導を受け、帰国後東京帝国大学梵語学教授などを務めた人物である。

この後1904（明治37）年ごろから、Oxford、Cambridge両大学間の競艇を始めとする各種スポーツ競技の報道において、従前は片仮名で表記されていたOxfordとCambridgeが「牛津」「剣橋」と表記されるようになる。次がその初出例である。当初しばしば加えられていた振り仮名も次第に使われなくなっていく。

牛津（オツクスフオルド）大学と剣橋（ケンブリツヂ）大学の端艇（ボート）選手競漕（だいがく）は三艇身の距離にて剣橋（ケンブリツヂ）の勝利に帰せり。（『東京朝日新聞』1904年3月28日）

新聞における意訳地名使用の動機の一つは紙面の節約であろう。字数の制約の厳しいタイトルでは漢字表記を使い、本文では片仮名表記を使っている記事は多い。

「牛津」と「剣橋」の表記は、新聞における使用開始とともに一般社会に浸透する。学術出版やスポーツ報道以外にも、桜井彦一郎『欧洲見物』(1909)、黒板勝美『西遊二年欧米文明記』(1911)などの一般的な旅行記を含む多種多様の文脈で「牛津」「剣橋」が使われるようになった。

20世紀の前半が、日本における「牛津」および詳しくは４節で見る「剣橋」の使用の最盛期であった。使用が非常に広範で、特定の例を示す意味もないので、追加の挙例は省く。

エチ・ヰ・エヂアトン著・永井柳太郎訳『英国殖民発展史』(1909)はOxford大学教授H. E. Egertonの著書を早稲田大学卒業後Oxford大学に留学した永井が現地で翻訳したものである。永井の書いた訳書の序や本文においては「牛津」という意訳地名が使われているのに対し、早稲田大学教授有賀長雄の寄せた巻頭の序文では片仮名表記が使われている。この対比は、「牛津」がまず英国で広まり、その後日本に伝わったことを物語っている。

なお、1905年12月3日の『読売新聞』に「乙津」という部分意訳地名が現れるが、調査の限りでは孤例である。部分意訳地名は通常汎用的な要素――普通名詞や形容詞――の意訳と固有名詞の音訳の組合せによって構成されるが、「津」がほかの地名の意訳に使われることはなく、その意味で「乙津」は部分意訳地名として異例である。「乙津」は、「牛津」をもとにして、それを一般的な部分意訳地名風に改変したものであろう。また、1900年のある資料に「牛城」という表記の話が出てくるが（後述）、当時のほかの資料中には用例を見出せなかった。いずれにせよ、これは実際に使われていたとしても「牛津城」の短縮形であろうから、「牛城」は「牛津」の異形として数えられるべきものではない。

3.6　意訳地名の衰退――第２次世界大戦後

1946（昭和21）年に文部省の発表した「当用漢字表」において「使用上の注意」の１項として次の原則が定められた。

> 外国（中華民国を除く）の地名・人名は、かな書きにする。ただし、「米国」「英米」等の用例は、従来の慣習に従つてもさしつかえない。

これを受けて意訳地名「牛津」「剣橋」は日本社会から急速に姿を消していく。

現在でもまれに意訳地名「牛津」は使われている。しかし、その使用はOxfordへの愛着や懐旧を背景とした文脈に限られていると見られる。「牛津」を書名に含む最新の書籍は瀧口流石（りゅうせき）『句集牛津（オックスフォード）の戯言（ざれごと）』(2010)であるが、奥付によれば著者はOxford大学留学後英国に居住し、大学教師、美術評論家、投資銀行家、画家、世界俳句クラブ会長などとして活動した人物である。[22]

---

[22]『牛津の戯言』には、英国を主題とした句としては次のようなものが収められている。
絵筆とるテームズ河や涼新た
不惑年オックスフォードの夏寒し
裏表紙の見返しにはテームズ川とウェストミンスター宮殿を描いたスケッチが印刷されている。

3.7　片仮名表記から意訳地名への交替ほか

意訳地名「牛津」の発生と社会への普及、そして、衰退について時代を通して見てきたが、Oxfordの片仮名表記（ないしアルファベット表記）から意訳地名「牛津」への交替の局面などを観察できる３種類の資料がある。

3.7.1　島村抱月の留学日記

島村抱月『渡英滞英日記』は、1902（明治35）年から1904年にかけてOxford大学に学んだ島村の留学日記である。調査は筑摩書房刊『明治文学全集』43(1967)所収の日記による。

『渡英滞英日記』において、1903年4月22日までの日記ではOxfordはそのままアルファベットで表記されているが、同25日以後は「牛津」という意訳地名のほか、「着津」「来津」「帰津」という語がしばしば用いられるようになる。ただ、日記に当初現れるのは「牛津」ではなく「着津」や「来津」ばかりで、「牛津」の出現は半年後のことである。次に示す例における平仮名と片仮名の使い分けは原文の通りである。

四月廿五日（中略）午前好本君来ル。昨夜着津トノ事也。　（1903年4月25日）
夕方Dante講義ヨリノ帰路豊崎君ヲ訪ヒ、田中君来津セバ同道案内シ呉レ玉ヘト頼ム。　（1903年5月8日）
九時五十分Paddington発にて十一時八分牛津着。　（1903年10月10日）

もし島村が渡英前から「倫敦」などと同じく「牛津」という表記法を従うべきものとして知っていたのであれば始めからそのように書いたであろうから、このこともやはり「牛津」という意訳地名はまず英国在住の日本人のあいだで広まり、その後日本に伝播した――島村の出発時（1902年）には日本ではまだ広く知られていなかった――ことを示唆している。

1903年の4月22日から25日にかけて、ないし、その少し前に島村が「牛津」という表記を知った経緯は日記には記されていない。しかし、4月23日の日記に次の記述があり、島村は同日この豊崎という、上に挙げた5月8日の「来津」の例にも出て来た人物から知識を得た可能性が高い。

今日午後豊崎君来ル。政友会ノ破裂ガ納マレリナドノ噂ヲ聞ク。　（1903年4月23日）

前年（1902年）の日記によれば、豊崎は島村よりも先に渡英しており、同年5月22日には渡英後間もない島村は豊崎を訪ねてOxford大学の話を聞いている。この豊崎は、『社会主義批評』(1906)、『ルーター（ロイター）電報翻訳法』(1907)、『仏蘭西の銀行及金融』(1916)などの著作のあ

る豊崎善之助（初期の出版での表記は「善之介」）を指すと見られる。

「着津」「来津」「帰津」という表現の使用は『渡英滞英日記』以外の資料には確認できていない。同類の表現としては、南条(1927)冒頭の高楠順次郎による序文に「在津」という表現が出て来る。いずれもOxford大学に留学していた人間の生活感覚に基づく表現だったということであろう。

3.7.2　長沢亀之助の数学辞典

長沢亀之助（1861～1927）の著した多数の数学辞典を見ると、早い時期に出版されたものでは、「英国」「倫敦」などを例外として西洋の人名・地名はアルファベットで表記されているが、1908年（明治42）9月年刊の『問題解法三角法辞典』ではOxfordについては「牛津」の表記が採用され、翌1909年刊の『解法適用算術辞典』ではCambridgeも「剣橋」と表記されている。

『解法適用数学辞書』(1905)	Oxford、Cambridge
『問題解法代数学辞典』(1907)	Oxford、Cambridge
『問題解法続幾何学辞典』(1908.4)	Oxford、Cambridge
『問題解法三角法辞典』(1908.9)	牛津、Cambridge
『解法適用算術辞典』(1909)	牛津、剣橋

3.5で見たように、1904年には新聞のスポーツ記事でも「牛津」「剣橋」が使われ始める。1908～1909年ごろに至って長沢ないし編集者が数学辞典においてもOxford、Cambridgeを「牛津」「剣橋」と表記するのがふさわしいと判断したということであろう。

3.7.3　新聞における使用状況の推移

新聞での「牛津」の使用状況について『朝日新聞記事データベース 聞蔵Ⅱビジュアル』の検索機能を用いて簡易な調査を行ってみた。読売新聞と毎日新聞についても同様の調査を試みたが、紙面画像からのキーワード抽出が最も充実しているのが朝日新聞であった。

1895～1950（明治28～昭和25）年の範囲における「牛津」「オックスフォード」を含む年間の記事数を図４に示す。両様の表記を含む記事は「牛津」「オックスフォード」それぞれの統計に含めている。

この統計から、意訳地名「牛津」が20世紀前半の新聞で使われ、一般の日本人多数の目に触れる機会が少なくなかったことが分かる。また、同時に、「牛津」が普及したこの時期においても、依然として片仮名表記のほうが支配的であったことも知られる。

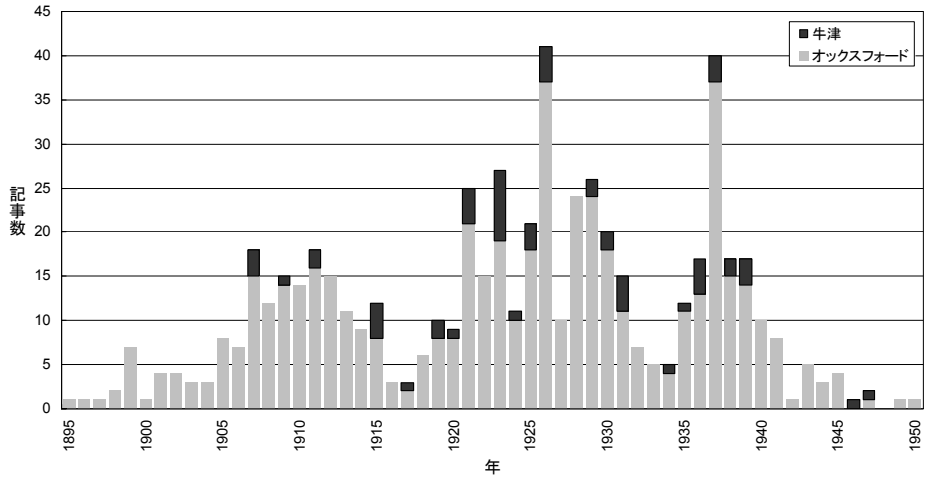

図4　朝日新聞における「オックスフォード」「牛津」の使用状況

ただし、図４の統計には不正確な点がある。それは、紙面からのキーワード抽出に不統一があり、特に「牛津」を含む記事が「牛津」ではなく「オックスフォード」でキーワード化されていることがあることによる。例えば、3.5に挙げた1901年の「明治三十三年紀」の記事や1904年の「端艇選手競漕」の記事における「牛津」の使用が図４には反映されていない。しかし、約200件の記事について検索結果と記事文面を照らし合わせて確認したところによれば、キーワード抽出の不統一に関して図４を修正したとしても、「牛津」の黒い部分の面積が多少増えるだけである。キーワード抽出に関しては、不統一のほかに抽出漏れの可能性もあり得る。[23]

4 「剣橋」

次に、日本資料における「剣橋」の使用状況を見る。

4.1 「剣橋」以前

Oxfordと同じくCambridgeについても、当初は片仮名表記と中国式の音訳地名が用いられていた。片仮名表記には「ケンブリッジ」のほか「ケムブリチ」「カンブレツヂ」「カーン

23 さらに別の問題として、片仮名表記の「オックスフォード」の用例には人名であるものもある。筆者の見落としがなければ朝日新聞の記事では人名は「牛津」と書かれていないので、比較の対象に含めることには問題があることになる。しかし、確認した約200件の記事のうち「オックスフォード」が人名を表すものはわずかに２件であった。したがって、人名としての「オックスフォード」の使用例の存在も図４を見るうえで事実上の影響はない。

ブリッチ」のようなものがあり、その大半は次のパターンに該当する。

{ケ/カ/キャ}(ー){ン/ム}ブ{リ/レ}(ッ){ジ/ヂ/チ}

音訳表記は「堪比日」の使用が多く、ほかに「岡比黎日」「堅不列痴」などがある。

4.2 「剣橋」の使用開始

「牛津」と「剣橋」の起源も普及の過程も知らない現代の目で見れば、両者が並行的な歴史を有するかのように感じられるのも無理のないことである。しかし、実のところ、意訳地名「牛津」の発生・普及と部分意訳地名「剣橋」のそれとのあいだには大きな時間差があった。

まず、「牛津」の初出が1878（明治11）年であったのに対し、「剣橋」の初出はそれより20年も遅い1898（明治31）年である。この年は南条の帰国（1884年）の14年後であり、「牛津」使用の時期区分で言えば第２期の終盤に当たる。次がその初出例である。

剣橋同窓会とは英国ケムブリッヂ大学校卒業の人々の組織したる会にして
（「雑報」『東洋学芸雑誌』第200号(1898)）

これに次ぐ「剣橋」の用例を２例示せば次の通りである。

千八百六十七年剣橋大学の美術講師となり、千八百七十二年に至りて、牛津大学の教授に任(ママ)せられぬ。（「ラスキン逝く」『帝国文学』第6巻第3(1900)）

一日に挙行せられたる英国二大学の競争に於て剣橋は牛津に対し二十艇身の捷を得たるの報。（「時事日記」『東京経済雑誌』第1024号(1900)）

南条の著作物における早い用例は次の２つである。いずれも内容は笠原の追憶である。

剣橋(ケンブリッヂ)大学にて馬博士【＝Max Müller】の講義ありし時には相携へ往て之を聞き
（南条文雄「恩師馬格師摩勒先生に関する話」『精神界』第3号(1901)）

十月之交朔風寒。巨舟一夜対晴瀾。横行大陸身已疲。帰到牛津未曽安。剣橋学堂奇籍足。明日拉我試借観。
（南条文雄「懐旧三十韻詩稿」(1901)、『精神界』第2巻第1号(1902)所収）

用例発見に関わる偶然の要素に左右される初出年が異なるだけではない。２つの意訳地名の使用開始と普及の時間差を反映して、Oxfordを「牛津」としつつCambridgeは片仮名で表記した例が多く見られる。その数例を示せば次の通りである。

英国牛津大学校（中略）英国ケンブリヂユ大学
（南条文雄「新書籍英清ヨリ来ル」『令知会雑誌』第23号(1886)）
同国牛津ケンブリツジの両大学は（『教育公報』第227号(1899)）
生徒卒業後はケンブリツチ又は牛津大学に入学する者多し。
（小西重直『現今教育の研究』(1912)）
英国牛津大学で（中略）ケムブリチ大学で（『芸文』第5巻第2号(1914)）

同様に、島村抱月は「牛津」を使い始めた後も、Cambridgeは最後まで片仮名かアルファベットで表記している。3.7.2で見た長沢亀之助『問題解法三角法辞典』(1908)においても「牛津」と「Cambridge」の組合せであった。

もっとも、逆の組合せの例がないわけではなく、調査では３件の資料に見出された。その第１は「剣橋同窓会」に関する『東洋学芸雑誌』の記事（上掲）においてであり、次が第２の例である。

剣橋でもオクスフオードでも、其体育遊戯の盛んな事は予想の外で
（「剣橋学生々活」『教育時論』第769号(1906)）

この記事はCambridge大学への留学生が一時帰国時に行った学事報告の内容を聴衆の一人が紹介したものである。両例のようにCambridge大学に密着した文脈では表記の種類の逆転が起きやすかったということであろう。第３の例は長谷川乙彦『戦後に於ける教育思想及方法の革新』(1920)で、同書は基本的には「牛津」「剣橋」と表記するが、一部に「オツクスフオルド」という片仮名表記が出て来る。

南条は帰国２年後の1886年に書かれ『航西詩稿』(1893)に収められた漢文では「剣舞里地」という音訳地名を用いている。

此時文雄実在英国剣舞里地校読楞伽経梵文。
（南条文雄漢文(1886)、『航西詩稿』(1893)所収）

片仮名の使えない漢文の文脈で漢字表記が選ばれるのは当然のことであるが、音訳地名の

使用は当時「剣橋」という意訳地名がまだ作られていなかったか、少なくとも、南条がそれを知らなかったことを示している。その数年後に南条自身によって書かれた加藤宜利編『南条文学博士小伝』(1891)にも「剣舞里地」および「剣府大学」という表現が見出される。

もっとも、南条と笠原はより早い段階ではCambridgeの意訳地名を用いている。これについては次の4.3で見る。

4.3 「剣橋」定着までの曲折

Oxfordの翻訳には、3.5の最後で見た「乙津」を唯一の例外として、当初から「牛津」という表記が一定して使われていた。これに対し、Cambridgeについては「剣橋」という表記の定着に至るまでには、「剣」の部分を異にする複数の表記が試みられている。

まず、最も早い時期に現れる表記は「曲橋」である。

> 弟等以十月二十日回倫敦、留一日。二十二日帰牛津、得新居、居数日。到曲橋、滞在八日。　（南条・笠原楊文会宛て書簡(1881)、『教学論集』第20編(1885)所収）
>
> 御序もあらば曲橋にて一寸御写取被下(ママ)は至極幸ひなり。
>
> （笠原研寿南条文雄宛て書簡(1882)、『教学論集』第5編(1884)所収）
>
> 到るの日先づ曲橋大学校書籍館所蔵の倶舎註を借得て笠原の失ひし所を写し得たり。
>
> （エフ・マクス・ミユーラル「笠原研寿」『教学論集』第5編(1884)、南条文雄付記）
>
> 曲橋牛津の大学を初めとして　（近角常観『信仰問題』(1904)）

最初の例は、南条と笠原が渡欧中の楊文会（後出）に宛てた書簡の冒頭部分である。第２の例は、病重く帰国した笠原が、Cambridge大学で書写した仏典の１枚を紛失したことに気付いてOxfordにいる南条に書き送った依頼の書簡の一節である。

その後、「賢橋」「建橋」「犬橋」という表記が現れる。

> 英国賢橋及牛津大学生　（『教育時論』第521号(1899)）
>
> 英国の賢橋に居た物理学者　（『薬学雑誌』第328号(1909)）
>
> 後に建橋大学に転ぜりと云ふ。　（島文次郎『英国戯曲略史』(1903)）
>
> おくすふぉーど（牛津）、けんぶりじ（犬橋）　（神戸弥作『外国地理』(1905)）

「賢」「建」「犬」はCamの音を写したものであろうが、「曲」の使用は一見不審である。しかし、英語の辞書によればcamという廃語があり、‘crooked, bent’（ねじれた、曲がった）という意味を表す。「曲橋」の考案者――ほぼ疑いの余地なく南条または笠原――はOxford

大学とともに英国を代表するCambridge大学に対して「牛津」と釣り合いの取れる意訳地名を与えようとして辞書に頼って翻訳したのだが、Camが川の名であることを知らなかったために結果的に誤訳になってしまったということであろう。[24]「曲橋」は、部分意訳の「剣橋」「賢橋」「建橋」「犬橋」と異なり、そして、「牛津」と同じく、その全体が英語地名の意訳である。

4.4 「剣橋」の考案者と考案時期

4.2と4.3で見たように、「剣橋」は「牛津」より初出と普及が遅く、しかも、表記が安定するまでの時期には異なる表記も用いられていた。

「剣橋」の考案者や考案時期に関して確かなことは分からない。はっきりしているのは、「剣橋」は「牛津」よりも発生がかなり遅かったこと、そして、「牛津」の場合とは異なり、南条らが英国で「剣橋」を知り――あるいは考案し――、その後日本に伝えられたわけではないということである。

南条と笠原が留学中から意訳地名「曲橋」を使っていた（4.3）こと、そして、南条が帰国後「剣舞里地」「剣府（大学）」という音訳地名を使っている（4.2）ことからすれば、「曲橋」「剣橋」ともに南条によって考案されたと見るのが自然な解釈の１つである。南条はテムズ川を「黛眉江」と表記して詩作したことを知人に告げて称賛されたという話を後年書いている（南条(1927)）。また、笠原を追憶して詠んだ「懐旧三十韻詩稿」（『精神界』第2巻第1号(1902)所収）ではOxfordのKing's RoadとLogic Streetを表す意訳地名「王路」「論理街」を使っている。[25] 英国の地名の漢字表記を考案・使用することに南条は積極的であった。

しかし、「曲橋」を南条による考案と見ることには無理がないが、「剣橋」については南条を考案者とする見方にとって不利な材料が２つある。１つは考案時期の問題である。南条はOxfordとCambridgeを加藤宜利編『南条文学博士小伝』(1891)では「牛津」「剣舞里地」と記し（4.2）、『仏教史林』第25号(1896)に掲載された「印度古代地理 尼波羅国」では「牛津」「ケンブリヂュ」と書いている。他方、1898年には「剣橋」の初出例が見られる（4.2）。もし「剣橋」の考案者が南条だったとすれば、「剣橋」は1896（明治29）年から1898年にかけてのわずか２～３年のあいだに作られ、かつ、社会にそれなりに普及したことになる。もう１つの不利な材料は動機の問題である。サンスクリット仏典書写のためにCambridge大学の図書館を訪れることのあった留学期間と異なり、帰国後の南条にとってCambridge大学との関わり

---

[24]『教学論集』第5編所載のミュラーによる笠原追悼文と訳者南条による付記は部分的な改稿を経て『僧墨遺稿』に収められているが、それが南条(1921)に再録された段階では「曲橋」がすべて「剣橋」に訂正されている。

[25] ただし、「王路」「論理街」が南条自身の考案によるものかどうかは不明である。

は稀薄になっていたはずである。

そのように考えれば、「剣橋」はむしろ、初出例（4.2）の内容――「剣橋同窓会」の消息――が示唆するように、Cambridge大学との関わりの深かった日本人によって考案されたと見るほうが自然であることになる。とは言え、南条がCambridge同窓会の関係者の依頼を受けて――あるいは、関係者とのこの話題に関するやり取りの中で――「剣橋」を考案したという可能性も考えられ、その場合は南条考案説にとっての不利な材料として挙げた２点はいずれも問題ではなくなる。

残念ながら真相は分からない。調査で得られた情報の限りでは、「剣橋」の考案者は南条もしくはCambridge同窓会関係者のいずれかであったという推定にとどめざるを得ない。

「剣橋」発生の地は、考案者が南条だったとすれば、「牛津」とは異なり日本国内であったことになる。考案者がCambridge大学に留学した日本人だったとすれば、英国か日本のいずれかであったことになる。

なお、陳(1990)は「剣橋」における「剣」の字を用いた音訳は広東語の発音――広東語辞典によればgim3――によるとする。しかし、それは単に音訳が中国語音によって行われたという想定に基づいてなされた推測であろう。筆者の理解が正しければ、「剣」字選択の根拠は日本語の漢字音ケンである。

5 「牛津」「剣橋」をめぐる付随的事情

ここでは、意訳地名「牛津」「剣橋」に関わる付随的な事情、問題３点について述べる。

5.1 意訳地名に対する当初の否定的評価

「牛津」「剣橋」という地名は、南条を始めとする英国の大学や学問に関わりや関心を持っていた人間は別であろうが、一般には当初逸脱的なもの、奇異なもの、表記の混乱を招くものとして否定的に受け止められがちであった。

次の例は外国地名の表記統一の必要と方策を論じた記事の一節で、著者は日本語における地名表記の現状を嘆いている。ここに出て来る「牛城」にはすでに3.5の最後で少し触れた。

> 甚しきは訓と音とを混じ、或は音と意義とを混用する者あり。例へばニージーランドを新西蘭、ケンブリツヂを剣橋、オツクスホードを牛城、トランスヴアールを虎伏波、ウラジオストツクを浦塩斯徳と為す(ママ)か如し。其他奇異なる表音字枚挙に遑あらず。
>
> （万峰居士「東亜の大聯鎖」『憲政党党報』第4巻第42号(1900)）

ここで「新西蘭」という表記を日本人による音義混成と見ているのは著者の事実誤認であり、実際には中国語からの借用である。例えば、『東西洋考毎月統記伝』戊戌7月(1838)、徐継畬『瀛環志略』(1848)、慕維廉[26]編訳『地理全志』(1853)に使用が見られる。また、当時の中国資料では類似の「新塞蘭地」「新希蘭徳」などの表記も用いられている。

同様の意見は新聞に掲載されたエッセイや投書にも見出される。

> 釜山浦、小松山等の読み間違へも可笑いが欧米の地名を漢字で訳するのも我儕に言はすと小松山と五十歩百歩の様に思はれる。ヲツクス、フオルドを牛津、ケンブリツジを剣摺などは全然鵺然たる翻訳（?）だ。　（『読売新聞』1902年6月24日、「茶ばなし」）

> 西洋の地名或は人名を書くのに漢字と片仮名とが両方使用されるが漢字の方は実に不便だ。欧羅巴をユーロープ又はオエローパと読ませるのは未だしも、牛津のオツクスフオールドは意味から来たのかは知れないが大抵の地図や歴史に堂々と書かれてあるから恐入る。　（『読売新聞』1902年11月9日、「ハガキ集」）

第１の引用にある「剣摺」はほかに使用例を見ず、「橋」と「摺」の字形の類似による誤植である可能性が高い。

また、第２の引用の言うように“大抵の地図や歴史に堂々と書かれてある”ことは調査で確認できなかったが、すでに4.3に挙げた次の１例は確かにあった。

> おくすふぉーど（牛津）、けんぶりじ（犬橋）　（神戸弥作『外国地理』(1905)）

上に引用した「牛津」「剣橋」に関する批判はいずれも19世紀と20世紀にまたがる短期間に書かれたものであり、執筆の背後には新奇な表記に対する反発の要素があったものと思われる。しかし、1904年には「牛津」「剣橋」は新聞でのスポーツの報道にも使われ始める。意訳地名の社会への浸透に伴い、人々はそれに見慣れ、非難の動機を失っていったことであろう。その後は次のようなむしろ好意的な受け止め方はあっても、批判的な意見はもはや見出せなかった。

> 過日の貴紙二面に剣橋と書きケンブリツヂと傍訓のあつたのは真に日英同盟代表的の文字だらう。田狸【＝読売新聞記者の筆名】さん斯う云ふやうな字を知つて居るなら二ツ三ツ教へ給へ。（信州蔵六居士）【田狸による回答は省略】
>
> （『読売新聞』1907年6月28日、「滑稽問答」）

[26]「慕維廉」は英国人宣教師ウィリアム・ミュアヘッド（William Muirhead、1822～1900）の中国名。

5.2　両面的な意訳地名としての「牛津」「剣橋」

本稿ではここまで「牛津」と「剣橋」（の「橋」の部分）を2.3で定めた意味での半意訳地名として扱ってきた。つまり、表記上は意訳しても、発音は外来語音であるとして話を進めてきた。

しかし、資料の示すところによれば、事実は必ずしもその通りではなかった。次の例に見るように、「牛津」にギュウツ、「剣橋」にケンキョウといった読みが振り仮名の形で示されていることがまれにある。

> 賭の割合は剣橋（けんきやう）五に対する牛津（ぎうつ）の一なり。　（『読売新聞』1907年3月18日）
> 第九十二回剣橋（けん）、牛津両大学対抗ボートレースは多数選手を戦線に送つたので開催を危まれて居たが　（『東京朝日新聞』1940年3月4日）

後者の例では「剣橋」の読みが部分的にしか示されていないが、ケンブリッジという読みがこのように示されることは考えられないので、書き手の意図はやはりケンキョウかケンバシであろう。こうした「牛津（ぎゅうつ）」や「剣橋（けんきょう）」ないし「剣橋（けんばし）」は半意訳地名ではなく、「真珠湾」や中国語の「牛津（ニウチン）」と同様の完全な――すなわち、表記と発音の両面における翻訳・変換を経た――意訳地名である。[27]

しかし、振り仮名のない用例については書き手がどのような読みを意図していたか、読み手がどのように読んでいたかを今知る由もない。したがって、「牛津」「剣橋」が両面的な意訳地名として用いられることもあったという事実の指摘にとどめざるを得ない。

5.3　「牛剣」「剣牛」――「牛津」「剣橋」の複合

意訳地名「牛津」「剣橋」の使用が広がる中で、1907年ごろから、両大学を表す「牛剣」「剣牛」という表現も作られ、しばしば「牛剣両大学」「剣牛競漕」のような複合語の形で用いられた。使用の文脈は多くは各種スポーツ競技の報道であるが、長谷川乙彦『戦後に於ける教育思想及方法の革新』(1920)にも「牛剣両大学」という表現が現れる。

「牛剣」と「剣牛」は現代の感覚ではギュウケン、ケンギュウと読まれていたもののように感じられるが、実際の読みがどうであったかは詳らかでない。「牛剣」「剣牛」はほとんどの用例において読みが示されていないが、例外的に振り仮名の添えられたものを時間順に示せば「牛剣競漕（オツクスフオードケンブリツヂレガツタ）」「英国牛剣（オツクスケンブリツヂ）両大学」「剣（けん）牛対校ボートレース」（『東京朝日新聞』1915年4月6日、1920年6月6日、1937年3月25日）である。

---

[27] 5.1に挙げた３番目の例に含まれる「牛津（ぎうしん）」も同様に両面的な意訳地名である。ただし、これは文脈から考えて、書き手による作為的な読みである可能性がある。

調査の限りでは、当初は「牛剣」「剣牛」両様の表記が使われていたが、後に「剣牛」が支配的になったという印象がある。Cambridge大学への留学経験を持つ日本人の同窓組織にOxford大学留学経験者を加えて1906年に作られた合同の同窓組織がThe Cambridge & Oxford Societyと命名され（Koike(1995)）、「剣牛会」と訳されたことが影響を与えた可能性がある。

ちなみに、『慶応義塾学報』第192号(1913)の大学野球の記事には「慶斯」という表現が出て来る。「斯」はStanfordの音訳である「斯坦福（徳）」(2.2) の第１字である。ほかに「慶ス」や「ス大学」などの表記も使われている。同第195号(1913)に出て来る「慶華」の「華」はWashingtonの音訳「華盛頓」の第１字である。

6　中国語における「牛津」「剣橋」

引き続き、中国語での「牛津」「剣橋」の使用状況について、資料の調査に基づいて筆者の理解するところを述べる。

6.1 「牛津」「剣橋」以前

中国資料中に見出されるOxford、Cambridgeの音訳地名は、日本資料中のそれに比べて表記がはるかに多様である。日本資料でよく見られる表記のほかにも、Oxfordについては「敖斯仏」「鄂斯福」「悪士弗」「阿司仏徳」「阿克司弗」「奥克司芬」「坳克司付爾」「唖克司福特」「奥克司火爾特」、Cambridgeについては「琴布列」「堪貝支」「康比治」「千白雷池」「甘比利支」「堪卜立址」「坎勃列治」「監布烈住」「克摩布利基」などの表記があり、多種多様の発音と文字が選ばれている。

そのことは、中国人は聞き取った英語の発音を自身の感覚と判断に基づいて音訳表記し、日本人はその主なものを借用するという関係にあったことを考えれば当然のことと言える。しかし、実際はそれだけのことではなかった。上記の多様な表記のうち字数の多い「奥克司火爾特」や「克摩布利基」はおそらく日本語の片仮名表記を逐字的に中国語に移したものであり、そうした事情が中国資料における音訳表記の多様性を増す一因となっている。[28]

28「奥克司火爾特」は字数が多いだけでなく、Oxfordのfoの部分の音訳に/h/の子音を用いている点でもほかの音訳表記と異なる。日本語では今もplatformを「（プラット）ホーム」、interphoneを「インターホン」と呼ぶのが一般的である。また、20世紀後半にはfanやfilmを「ファン」「フィルム」と発音する人がまだ少なからずいた。近代の一般的な日本人にとってOxfordの日本名の発音は現代の「フォ」の代わりに「ホ」ないし「フオ」の音――細かい話を省いて割り切って音声記号で記せば[ho]ないし[huo]――を含んでいたものと思われる。「火」はそのような発音、表記を漢字に移したものであろう。また、CambridgeのCamは中国語の音訳表記において多くの場合漢字１字で表される。「克摩布利基」の「克摩」の２字は「ケム」という仮名表記の文字単位での転写であった可能性がある。

6.2 「牛津」の早期の例——19世紀終盤

筆者の確認し得た、中国資料——中国人を書き手とする資料——における意訳地名「牛津」の初出例は楊文会（1837～1911、字仁山）が南条と笠原に宛てた書簡に現れる。

> 弟在滬上【＝上海】与松本上人白華談次、得悉真宗高士有西遊者、秉払于英。頃至倫敦、晤末松氏謙澄、詢知二公退居学地牛津精習梵文。惜離都稍遠、不獲造訪瞻仰高風、欽佩靡已。　（楊文会南条文雄・笠原研寿宛て書簡(1880)）

楊文会は清朝末期の仏教復興に尽力した人物で、仏教書刊行のために1866年に南京に金陵刻経処を創設した。この書簡は中国公使の随員として渡仏した楊がロンドンを訪れたときに、英国での仏教受容やサンスクリット仏典などに関する質問をOxfordにいる南条と笠原に書き送ったものである。楊は「牛津」という意訳地名を引用に出て来る末松謙澄[29]を通じて知ったのであろう。4.3に挙げた南条・笠原の「曲橋」を含む書簡は、上の書簡を発端とする交流の一部であった。

この書簡は『令知会雑誌』第9号(1884)に掲載された南条の記事「学窓雑録」に「楊仁山来書　明治十三年四月廿六日」として収められている。その日付はおそらく書簡の到着日であり、とすれば引用に際して省かれた書簡の日付はその数日前の4月20日過ぎであることになる。[30] このことから、中国資料における「牛津」の初出年は明治13年すなわち1880（光緒6）年ということになる。この年は日本における「牛津」使用の時期区分で言えば第１期の前半に含まれる。ただし、書簡の小字で示した部分——縦書きの「学窓雑録」では行内右寄せ——は南条が引用に際して添えた補足説明である可能性がある。[31] その場合は、すぐ下に掲げる1885年の書簡における用例が中国資料における「牛津」の初出例になる。

翌1881年には楊は希望がかなってロンドンの末松の住居で南条と面会し、その後おそらく1882年にはOxfordに南条を訪ねた（南条(1884, 1885, 1927)）。その後２人は生涯を通じて書簡や仏典・書籍の交換による交流を続けた（陳(1999, 2002, 2003)）。

楊と南条のあいだで交わされた書簡には「牛津」が繰り返し現れる。次の例は両者がそれぞれに帰国した後の1885年に楊が南条に宛てた書簡の一節である。この書簡は『令知会雑誌』第24号(1886)所載の南条の記事「新書籍英清ヨリ来ル（接前）」[32]に収められている。

---

29 明治・大正期の官僚・政治家(1855～1920)。1878年に外交官として渡英し、Cambridge大学で学ぶ。
30 書簡往復の時系列から、書簡は送付後2 ～ 3日程度で相手に届いていたものと見られる。
31 楊自身の編集による『等不等観雑録』巻七に収められた当該の書簡には小字の部分がない。同一の書簡でも南条側の資料と楊側の資料とでは文面に多少の不一致があり——表現の省略は楊側資料に多い——、書簡現物における小字部分の状態は不明である。なお、『等不等観雑録』の確認は『楊仁山居士遺著』（金陵刻経処、1919年）所収の版によった。
32 記事の表題は実際には誤植により「新書籍英仏ヨリ来ル（接前）」と印刷されている。目次では正し

敝友沈君仲礼[33]閲英文新報[34]、見足下在牛津闡揚梵学一段、併及弟名。聞之不勝慶幸、喜得附于高賢之末。（楊文会南条文雄宛て書簡(1885)）

出版物における「牛津」の早い時期の出現としては、千葉が1893（光緒19）年の次の用例を指摘している。同年は日本の「牛津」使用の第２期に含まれる。

英之牛津書院[35]有主講之馬君耆宿也。
（李提摩太[36]口訳・老竹筆述[37]「西国近事」『万国公報』第49次(1893)）

『万国公報』は米国人宣教師ヤング・ジョン・アレン（Young John Allen、1836～1907、中国名林楽知[38]）が上海で刊行した雑誌であり、「西国近事」は西洋の各種のニュースを西洋人が口頭で訳し、それを筆記役の中国人が文章化するという方法で作られた連載記事である。上の引用は、「大英国」の見出しのもとに掲載された「銀価余議」の条の冒頭である。原文を求めて調べてみたところ、当該の条は1892年12月28日の*The Times*紙に掲載されたミュラーの‘The silver question’と題された投書の不正確な抄訳であった。上に示した箇所を含む開始部分は「西国近事」への採録に際して加えられた補足説明で、文中の「馬君」はミュラーを指す。ちなみに、南条も「馬博士」「馬翁」「馬氏」などの表現を使っている。

しかし、日本人に宛てた楊文会の書簡はもちろん、『万国公報』に掲載された特定の記事

く「英清」と印刷されている。

33 沈敦和。仲礼は字。社会活動家、慈善家。生没年は資料によって一定しないが、19世紀後半に生まれ、1920年代に没している。留学経験を持ち、1902年から1906年にかけては後出の山西大学堂の督弁を務めた。名著や教材数十種の翻訳を行っている。

34 この「英文新報」が何のいつの号を指すかは不明である。南条は1884年3月にOxfordを発って帰国しており、遅くともそのころの新聞であったはずである。ところが、楊が1885年9月にこの書簡を書いたのはその１年半も後のことである。時間の隔たりが大きいが、楊は書簡で南条に英国からの帰国時にインド各地を訪れたかと尋ねてもいることなどから、相互の連絡がしばらく途絶えていたものと見られる。

35 千葉の挙げる用例とそれに基づく議論では「牛津大書院」と記されているが、実際には「牛津書院」である。

36「李提摩太」は英国人宣教師ティモシー・リチャード（Timothy Richard、1845～1919）の中国名。

37 記事では「江東老竹筆述」と表示されており、千葉は「江東老竹」を筆記者の名としている。しかし、「江東」は地名で名は「老竹」であろう。人名や組織名に地名を冠した表示は近代中国の文献に広く見られる。リチャードは「西国近事」の口頭訳を『万国公報』の第46次(1892)から第58次(1893)まで連続して担当しており、当初は筆記者名の表示が「袁竹一」であったのが第49次から「老竹」に変わっている。袁竹一は胡適らとともに上海の竜門書院に学び（欧陽編(1998)所収の「鈍夫年譜 胡伝」）、卒業後は同書院で教鞭を執っていた（沈(1987)）人物で、リチャード以外の宣教師の翻訳の筆記も担当している。また、袁竹一、老竹とも『中西教会報』にキリスト教に関する署名記事を執筆している。袁竹一と老竹は同一人物で、「老竹」は筆名であったものと推定される。

38 当初の中国名は林約翰。「約翰」は「ジョン（ヨハン）」の音訳である。アレンは後に中国社会に同化すべく西洋臭を感じさせない名に改めた（欧陽・姚(2012)）。

での「牛津」の使用が中国社会における「牛津」の一般化に直接寄与した形跡はない。それらの用例と20世紀初頭における中国での「牛津」の普及開始とのあいだに10年もの時間的な隔たりがあるのである。語の歴史を理解するには、その発生や初出を確認するだけでなく、社会における普及の過程を確かめる必要がある。

上の『万国公報』の記事で「牛津」が用いられた経緯については後に明らかにする。

日本では20世紀初頭には「牛津」と「剣橋」が書籍、雑誌、新聞で広く使われるようになったのと対照的に、中国でのそれらの普及は遅れた。康有為は、程道徳校訂『康有為牛津剣橋大学遊記手稿』(2004)として出版された1904年の英国両大学訪問記に「悪士弗」「監布烈住」「監布烈入」「監布列住」「監布力住」などと記し、1913年の「中華民国憲法草案」でも「悪士弗」「検布烈住」と表記している。中国における西洋の地名・人名の表記の統一を目指す宣教師たちによって刊行された外来名表記案集であるDevello Z. Sheffield *Western Biographical and Geographical Names in Chinese* (1900)[39]においてもOxford、Cambridgeは「阿司仏徳」「堪卑支」とされている。[40] これらの特定の事例に限らず、楊文会の書簡複数通と『万国公報』第49次の記事に見られる「牛津」の用例を例外として、20世紀初頭までの中国資料においてOxford、Cambridgeは調査の限りもっぱら音訳表記されている。

6.3 「牛津」「剣橋」の普及開始——20世紀初頭

日清戦争の後、20世紀に入ると「牛津」「剣橋」使用の普及の兆しが見えてくる。日本ではすでに「牛津」使用の第３期に達し、一般社会への浸透が始まった時期である。

荒川は、1904年に刊行された坂本健一著・新学会社編訳『外国地名人名辞典』に「牛津」が現れることを指摘している。

筆者の確認することのできた20世紀の中国資料における「牛津」の最も早い用例は、『遊学訳編』と『浙江潮』のともに1903（光緒29）年に刊行された号の記事に現れる。

> 英国之政治家雖中夜猶立于国会之議席討論議案侃々而談一国之利害。人皆曰牛津及克摩布利基大学所培養。　（「国民教育論（続前）」『遊学訳編』第6冊(1903)）
>
> 昔法之軍人学校以普法戦紀為教科書。英之牛津大学食堂及休息室中遍懸偉人照相。日之小学校施以元寇油絵図。此所謂感情的教育也。
>
> （霖蒼「鉄血主義之教育」『浙江潮』第10期(1903)）

---

[39] 副題を含む完全な書名は長いので文献のところに示す。同書成立の背景については王(1969)に詳しい。なお、同書は定義上中国資料ではない。

[40] ただし、外来名の表記の統一を目指すSheffield(1900)では音訳地名が意識的に選ばれた可能性がある。表記統一と音訳地名の関係については後述する（7.2）。

『遊学訳編』と『浙江潮』はそれぞれ湖南、浙江出身の日本留学生の同郷会が東京で刊行した機関誌である（秦(2011)）。『遊学訳編』の例においては、4.2で見た日本資料における事例と同様に、Oxfordだけが意訳され、Cambridgeは音訳されている。『遊学訳編』は翻訳主体の雑誌で、「国民教育論」については原文の出典を『国民新聞』と表示している。しかし、1890年から1895年にかけて刊行された『国民新聞』のいずれの号にも該当する記事は見当たらず――1895年8月6日の号に同題の記事があるが内容が異なる――、実際のところはこの記事は浮田和民『国民教育論』(1903)という書籍の冒頭部分の翻訳であった。日本語の原文においては、Oxford、Cambridgeともに片仮名で表記されている。それらの地名を中国語に移す際、前者については日本の学術界ですでに普及の進んでいた「牛津」を用いたが、後者については普及の遅かった「剣橋」を訳者も知らず、音訳表記に頼らざるを得なかったということであろう。[41]

沈(1994)によれば、日本語から中国語への突発的かつ大規模な語彙の流入は日清戦争後に始まった。意訳地名「牛津」は――そしてまた「剣橋」も――まさにその流れに乗って中国に伝播したことになる。

翌1904年には２つの資料に「牛津」の用例が見出される。その１つは荒川の挙げる『外国地名人名辞典』である。[42] Oxford以外の２つの項目における用例を示す。

> Cambridge（地）岡比黎日（中略）与牛津共為英国大学之粋。
>
> （坂本健一著・新学会社編訳『外国地名人名辞典』(1904)）
>
> Smith（人）斯密（中略）亜丹斯密者蘇格蘭之著名経済学家。学于格剌斯哥、牛津、壱丁堡諸大学。（同上）

この辞典は1903年に日本で出版された阪本健一[43]編の同名の辞典を基礎とし、内容に加除修正を施して――外国の範囲は日本と中国とで異なるので、そのまま訳したのでは中国の『外国地名人名辞典』にならない――中国語に翻訳したものである。ただし、この例でも日本の原本ではOxfordは片仮名で表記されており、「牛津」の表記は訳者の選択・判断によるものである。鄒(2012)の調査によれば、辞典の翻訳を担当した范均之と鄔烈倫はともに日本への

41『遊学訳編』の翻訳記事には訳者名の表示がない。もし訳者が日本人だったとすれば、これは本稿の定義による中国資料ではないことになる。

42 本辞典の内容の確認に際してはハイデルベルク大学のHeidelberg Encyclopedia Databaseに収められた電子資源を利用させていただいた。

43 同人の姓の表記は書籍によって一定せず、「坂本」「阪本」両様の表記が見られる。本辞典の日本で出た原本では内部的な不統一があり、表紙と奥付では「阪本」、本文の開始ページでは「坂本」と表示されている。

留学経験を持つ中国人である。Cambridgeは第１の例に見る通り「岡比黎日」と音訳されている。

同年のもう１つの資料は、『万国公報』に掲載された英国史に関する記事である。そこに見られる用例４件のうち２件を示す。

額西克司【＝Essex】亦囲王於牛津。
（馬林訳・李玉書述「続英国自由興盛記」『万国公報』第188冊(1904)）

鬱柏特【＝Rupert】王敗後従者尽失。幾於単騎奔回牛津時、王已出囲与其侄冒利反囲額西克司軍於西南。
（同上）

この記事は1904年から1905年にかけて『万国公報』に掲載された連載記事の１回である。この連載記事はJohn Richard Green（葛耳雲）の著書*A Short History of the English People*の一部をカナダ人医師W. E. Macklin（馬林）が口頭で訳し、李玉書が筆記したものである（張・曹(2011)）。初版の刊行が1874年である原著には複数の異なる版があるが、『万国公報』の記事と部分的に対照して確かめたところによれば当時最新であった1902年版が用いられたものと見られる。この連載は大幅な増補を経て1907年に『英民史記』と題した上中下３巻から成る訳書として出版されており、そこには「牛津」やOxford大学を表す「牛津書院」「牛津大書院」が多数回――上巻だけでも少なくとも計28回――出て来る。

培根熱支【＝Roger Bacon】到処覓書、潜心探討学問広博。後遂復帰英国、為牛津大書院之師。
（葛耳雲著・馬林訳・李玉書述『英民史記』上巻(1907)）

1905（光緒31）年には「剣橋」の使用が見出される。次に示す第１の用例が、調査で確認できた中国資料における「剣橋」の初出である。文中の「倭克斯仏脱」はOxfordの音訳である。

英国諸大学自古以羅甸語及希臘語為必修課目。後以研究此等古典不甚緊要、屡思廃之、然迄今未改。曩者倭克斯仏脱大学亦曽倡廃止希臘語之説、卒不果行。今剣橋大学復倡此談。然於畢業生会、以為然者僅一千人、不以為者則有千五百人之衆。其議遂又中輟。
（「剣橋大学於希臘語問題」『大陸』第3年第7号(1905)）

取旧有之剣橋、牛津両大学特添経済学科、以応国人之需求。
（楊志洵「欧美各国商業大学略述」『商務官報』丁未年第23期(1907)）

6.4 「牛津」「剣橋」の使用拡大——1910年代中盤以後

辛亥革命（1911～1912年）前後になると、「牛津」と「剣橋」の用例が徐々に増えてくる。

1910年代半ばまでに刊行された書籍、雑誌に確認することのできた用例の一部を次に示す。最初の用例の出典である『新世紀』は、日英仏３国に留学した呉敬恒(1865～1953)らが孫文の革命思想の影響のもとにパリで刊行した雑誌である。第２、第４の用例の出典である『東方雑誌』は刊行地こそ上海であるが、『遊学訳編』『浙江潮』と同じく、その内容には一見して日本の顕著な影響が認められる。実際、1904年刊の創刊号には日本の雑誌『太陽』と英米両国の雑誌*Review of Review*の体裁にならうとの編集方針が示され、冒頭の口絵は明治天皇の肖像に始まり、ロシア皇帝、西太后と続く。[44]

一千九百六年侯波徳【＝Herbert】教授在牛津大学演述斯賓塞爾【＝Spencer】氏之学説。

（呉敬恒「続暗殺進歩」『新世紀』第105号(1909)[45]）

羅【＝羅斯福、Roosevelt】氏之演説尚有二処、一在英倫牛津大学、一在徳国柏林大学。

（蒋夢麟「美国前総統羅斯福氏遊非欧両洲演説辞」『東方雑誌』第7年第8期(1910)）

考英蘭【＝England】牛津大学肄業其間者年費英金五百。（中略）即倫敦大学較牛津剣橋為省、亦須英金百五十之数。

（霧豹「比京賽会之教育出品」『教育雑誌』第2年第10期(1910)）

中国政府特派伍連徳君為防疫会之首領。伍君為英国剣橋大学堂医学博士。

（李広誠「撲滅中国北方之瘟疫」『東方雑誌』第8巻第8号(1911)）

大中各学校規律亦皆易以維持。所起之困難与英国牛津及岡比黎日大学同科。

（勃拉斯著・孟昭常訳『平民政治』下巻(1912)[46]）

中古時寛厚仁慈之思想以大学校為無費而教無謝而宿之地者已漸衰於牛津及剣橋両大学。

（同上）

牛津剣橋者英国最古且最有名之両大学也。

（楊超「欧美教育之進歩及其趨向」『甲寅雑誌』第1巻第4号(1914)[47]）

44『東方雑誌』が日本と深い関係を有していたことは寇(2009)が編集、執筆、印刷を含む多数の観点から仔細に検証している。寇によれば、日清両国の提携を旨とした『東方雑誌』は、1904年から1948年の45年間にわたって刊行され多数の著名人の寄稿した“近代中国史上最大の総合雑誌”であり、その“同時代における影響力は疑うべくもない”。

45 実際の誌面では著者名は「夷」と表示され、記事表題は誤植により「続暗殺歩進」と印刷されている。本記事は同年の『新世紀』前号に掲載された「暗殺進歩」という記事の続編である。羅家倫・黄季陸主編『呉稚暉先生全集 巻七 国是与党務』（中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会、1969年）——「稚暉」は呉敬恒の字——も用いて確認のうえ本文での著者名、表題の表記を調整した。

46『平民政治』の原本はViscount James Bryce *The American Commonwealth* (1888)である。

47 この記事には「牛津」「剣橋」だけでなく「牛剣両大学」という表現も出て来る。調査の限りでは、本記事——およびそれを再録した『東方雑誌』第12巻第1号(1915)の同題の記事——を例外として、近代

在印度各地之大学校、専門学校及英国之岡比黎日牛津両大学卒業者日漸増多。

（范石渠「近世民族主義之争闘」『大中華』第1巻第3期(1915)）

弟現仍寓客舎中補習諸科。下学期思肄業於哈仏【＝Harvard】大学。此校在美之根伯利支【＝米国Cambridge】部。卓卓有名亦如英之牛津大学也。

（脩然「苦情小説 双鴿塚」『民権基』第8集(1915)）

英国有新旧両種之大学。此両者教育主義雖殊而其皆為大学制度則同。旧式大学之代表者為牛津大学及剣橋大学。

（章錫琛「欧美大学之過去与現在」『東方雑誌』第13巻第4号(1916)）

『平民政治』の最初の例と『大中華』の例においては、Oxfordだけが意訳され、Cambridgeは音訳されている。『平民政治』の第２の例は最初の例から少し進んだ箇所に現れるものであるが、ここでは「剣橋」も用いられている。

次の例は、Oxford大学出版局が1910年ごろに刊行した読み物シリーズの翻訳『海族志』『牛津大学実業叢書』における発行者名や著者名の表示の一部である。

発行者 英国牛津図書公司

（鄧根原著・潘慎文編・陸詠笙訳『海族志 卷一 貝属』(1916)[48]奥付）

英国牛津大学柯克原著

（柯克原著・潘慎文編・陸詠笙訳『牛津大学実業叢書 第六卷 革履廠』(1916)[49]本文）

南条やミュラーが1883年に、レッグが1886年にOxford大学出版局から出した書籍（3.3）でも「牛津」が使われていたが、それは英文書に付加された日本語扉ないし付録の扉という副次的な位置付けの文脈における使用であった。中国でのこれらの翻訳書の出版により、「牛津」の表記がその正統性に関してOxford大学出版局による

図5 『海族志』

図6 『牛津大学実業叢書』

の中国資料に「牛剣」「剣牛」という複合表現（5.3）の使用は見られない。『甲寅雑誌』は章士釗によって東京で創刊された。

48『海族志』の原シリーズはFrancis Martin Duncan and Lucy Theresa Bell Duncan *The Wonders of the Sea*、編者の潘慎文は米国人宣教師Alvin Pierson Parkerである。

49『牛津大学実業叢書』の原シリーズはArthur Owens Cooke *The Oxford Industrial Readers*である。

公式の保証を与えられた形になった。[50]

筆者の見るところでは、1910年代の中盤が中国における「牛津」「剣橋」の本格的な普及の開始期である。日本での「牛津」使用の第３期が1900年からであったのと比べると15年ほど遅いことになる。

1920年前後になると、用例をさらに見出しやすくなる。1920年代までの「牛津」「剣橋」の用例をいくつか示す。

> 我於是到剣橋大学蔵中国書籍的地方、把各種志書都翻閲一過後来只見江蘇某県志書内載有一条　（陶履恭「社会調査(一) 導言」『新青年』第4巻第3号(1918)[51]）
>
> 考英国学制者第一念所触必為剣橋与牛津両大学。此何以故両大学為英国最古之大学、且為英国学術思想政治之源泉也。
>
> （君励「記剣橋大学並及英国学風」『教育公報』第6年第9期(1919)）
>
> 請再看英国牛津剣橋両大学、誰不知道他們素来是財政独立、不受国家的干涉。
>
> （種因「今後中国教育的希望」『教育雑誌』第12巻第2号(1920)）
>
> 金剛経（経名）（中略）一八八一年、馬克斯摩拉【＝Max Müller】氏更由日本牛津紀要亜利安編第一（日本高貴寺所蔵之梵本出版）、訳為英語、収於東方聖書第四十九巻。[52]
>
> （丁福保編『仏学大辞典』(1921)）
>
> 剣橋牛津両大学之科目不過語学、歴史、数学、哲学、博物等一般学科。凡各人之職業上所必需之特殊知識従不教授。　（周成編『教育行政講義』(1922)[53]）
>
> Milton, John(1608-74)〔弥耳敦〕英国詩人。生在倫敦。一六二五年以来、学於剣橋(Cambridge)大学、以俊秀聞。在剣橋大学肄学時、試為耶蘇降誕之歌(Ode on the Nativity)、寄奈丁格爾(To the Nightingale)等詩。　（唐敬杲編『新文化辞書』(1923)）
>
> 英国牛津与剣橋両大学年有賽船之挙。本月五日在倫敦比賽。
>
> （「牛津剣橋之賽船」『教育与人生』第26期(1924)）
>
> 在他二十一歳之前、因勇敢的宣布他的無神論、而被牛津大学所斥退。
>
> （鄭振鐸「文学大綱 第27章 19世紀的英国詩歌」『小説月報』第17巻第5号(1926)）

---

50 もっとも、「牛津」の表記の使用は英国のOxford大学出版局ではなく、翻訳書を刊行した上海の広学会の判断によるものであろう。広学会はキリスト教の普及を主目的とした出版組織で、当時ティモシー・リチャード（注36）が代表を務めていた（後述）。

51『新青年』第4巻第3号には1917年、民国8年と記されているが、これは7と8が入れ替わって印刷されたもので、正しくは1918年、民国7年である。

52『仏学大辞典』のこの解説はかなり混乱している。「牛津」に関わる箇所だけ訂正すれば、「日本牛津紀要亜利安編第一」は正しくは“英国オックスフォード大学出版局刊行の叢書Anecdota OxoniensiaのAryan Seriesの第1巻”である。

53 確認は1925年に刊行された版による。

最近英国的医学会、律師会、工程学会還有幾種職業的組織都已通過承認牛津大字典為它們各会裏的標準字典。　（葉公超「牛津字典的貢献」『新月月刊』第1巻第7号(1928)）

拠去年紐約時報的倫敦通訊説：牛津英文字典経一千三百人的合作、七十年時間、終於成功了。　（哲「牛津大字典之成功」『東方雑誌』第26巻第1号(1929)）

1930年代の用例も少数例示せば次の通りである。最初の例は、楊文会が南京に開設した仏教学校に学び、1923年には「世界仏教連合会」を設立し、日本の仏教界とも交流のあった僧侶太虚（1890～1947）の欧米訪問記の一節である。

英国由牛津剣橋倫敦教授等聯合所開之講演会則在東方文字学校。

（釈満智・釈墨禅編『太虚大師寰遊記』(1930)）

牛津大学出版部発行的「簡明牛津字典」久已成了学英文者不可少的工具。現在新出版的「牛津英文学伴侶」、我們看来、又少不了成為学英国文学者名符其実的、不可分離的「伴侶」。　（「一部英文学的参考書」『国立武漢大学文哲季刊』第4巻第1号(1934)）

牛津和剣橋誰也知道是英国最古的和最有学術権威的両間大学。無論説到学校地点、一切芸術建築物、学風和制度、以及各種歴史上的背境都完全与世界上有名的大学不同。

（余世鵬「牛津剣橋学風」『安大季刊』第1巻第1期(1936)）

こうして意訳地名「牛津」「剣橋」の使用は拡大し、第２次世界大戦後には日本でそれらがほとんど使われなくなった（3.6）のと対照的に、中国では「牛津」「剣橋」がOxford、Cambridgeの唯一の標準的な表記として定着した。大陸で刊行された中国地名委員会編『外国地名訳名手冊』（商務印書館、1993年）と台湾で刊行された国立編訳館編訂『外国地名訳名』（台湾商務印書館、1997年）はいずれもOxford、Cambridgeの項目に「牛津」「剣橋」の訳名を示すだけで、かつて中国で広く使われていた音訳地名の記載はない。その２冊以外にも第２次世界大戦後現在に至るまでに刊行された外国地名訳名辞典約10種類によって確認したが――最も早いものは『漢俄英対照常用外国地名参考資料』（地図出版社、1959年）、最新のものは張力主編『世界人名地名訳名注解手冊』（旅遊教育出版社、2009年）――、すべて同様である。

日本では「牛津」「剣橋」使用の最盛期においても片仮名表記が広く使われ、それらの意訳地名がOxford、Cambridgeの唯一の表記になることも代表的な表記になることもなかったのに対し、中国では「牛津」「剣橋」の定着によって従前の音訳地名は一掃された。その点においても日中の状況は異なりを見せている。

6.5 Oxford、Cambridgeの音訳地名の消滅時期

中国においてOxford、Cambridgeの音訳地名が消滅したのは大まかに言えば20世紀の半ばであろう。その正確な時期は不詳であるが、地名辞典などの観察から分かる限りのことを述べる。

すぐ上で述べたように（6.4）、第２次世界大戦後に刊行された外国地名訳名辞典は例外なく「牛津」「剣橋」の意訳地名だけを示している。

Oxford、Cambridgeの音訳地名の消滅の過程に関して示唆を与える地名辞典は何崧齢他編『標準漢訳外国人名地名表』（商務印書館）――以後『標準人名地名表』と略記する――である。同書は、Oxfordについては、1924年に出た初版では「牛津、鄂斯福、（奥克斯福）」とするが、1934年に出た改訂版（何炳松他改編）ではただ「牛津」とする。序文によれば、同書は外国地名の表記の不統一、混乱を解消すべく一貫した訳名の規範を示すことを目的として編纂された。そのような同書が初版の段階から個別的たらざるを得ない意訳地名を第一の訳名として示したという事実は、その使用がもはや抗しがたいまでに拡大していたことを意味する。そして、改訂版においては音訳地名の提示を断念する。「牛津」は1910年代から1920年代にかけて普及が進み、1930年前後には音訳地名がほとんど使われなくなっていたということであろう。Cambridgeについては、『標準人名地名表』の初版は「岡布里治、剣橋、（岡比黎日）」、改訂版は「開姆布利治（剣橋）」とする。これはOxfordの場合に比べて改訂の処置が異なり――意訳の「剣橋」の優先度を下げている――、改訂前後の関係も解釈しにくいが、改訂版の「開姆布利治（剣橋）」という記述に見る優先順位は編者たちの考える理想を示すに過ぎず、「開姆布利治」という表記が現実に普及することはなかった。周(1937)は『標準人名地名表』の改訂版を評して、一般に通用している訳名まで変える必要はなく、「剣橋」を「開姆布利治」に改めたりするのは実用上きわめて不便だと批判している。『標準人名地名表』はほかにも例えばIcelandについて初版で「挨斯蘭、（氷洲）」、改訂版で「愛斯蘭徳、（挨斯蘭）（氷洲）」と音訳地名の標準化を図ったが、現実には「氷島」という意訳地名が定着した。

中国でも1920年代のうちにはOxfordの英語辞典が輸入・販売され始めた。図７は中国で販売された1929年刊の*The Concise Oxford Dictionary of Current English*改訂版の見返しに押印された『明簡牛津字典』のスタンプである。[54] Oxford大学出版局の書籍の翻訳が「牛津図書公司」発行の表示を与えられて刊行されたことは6.4で見たが、西洋の学問を摂取し、広める立場にもあった中国人が利用する英語辞典（英

図7 『明簡牛津辞典』

54 本稿の開始部分に掲げた日本の新聞広告（図2）は1911年原刊の同辞典初版の広告であった。

英辞典）の中国語名に「牛津」が用いられたことは社会へのその普及をいっそう促進したことであろう。『標準人名地名表』の編者たちも、日々見慣れた意訳地名の「牛津」は無理なく受け入れられる心理状態にあったものと想像される。同書における上述のOxfordとCambridgeの扱いの差はそのことの反映であったかも知れない。

以上のように、1930年前後までにOxford、Cambridgeの表記の主役は音訳から意訳に取って代わられた。音訳表記が完全に消滅した時期と過程は未詳であるが、それを明らかにするには本稿の調査が対象としなかった20世紀中期の資料の調査が必要となる。

6.6 「牛津」「剣橋」の異表記

日本資料ではCambridgeが「剣橋」ではなく「曲橋」「賢橋」「建橋」「犬橋」と表記されることがあった（4.3）のと同様に、中国資料においても幾通りかの異なる表記が見られる。まず、「江橋」「岡橋」「康橋」という表記がある。

> 岡布理智 江橋 根伯利支 Cambridge（中略）英国岡布理智府之首都。（中略）其有名大学尚七世紀創設。（黄摩西編『普通百科新大詞典』(1911)）
>
> 奈端 牛董 牛頓 Sir Isaac Newton（中略）英国之数学家、物理学家。入江橋大学研究数学。（中略）一六八八年以後代表江橋大学而列於議員。（同上）
>
> 英国岡橋大学聖約翰学校正門 St. John's College Gateway, Cambridge
>
> 岡橋大学三一学校膳堂 Dining Hall, Trinity College, Cambridge
>
> （「挿画 英国岡橋大学各院撮影八幀」『進歩』第4巻第6号(1913)、写真の見出し）
>
> 不知道這位偵探穿的是不康橋大学的広袖制服！
>
> （胡適「建設的文学革命論」『新青年』第4巻第4号(1918)）
>
> 康橋的霊性全在一条河上。康河、我敢説、是全世界再秀麗的一条水。河的名字是葛蘭大（Granta）、也有叫康河（River Com(ママ)）的、許有上下流的区別、我不甚清楚。
>
> （徐志摩「我所知道的康橋」『晨報副刊』第1425号(1926)）
>
> 華茲華士(William Wordsworth, 1770-1850)是一個律師的児子、受教育於康橋大学(Cambridge)。（鄭振鐸「文学大綱」『小説月報』第17巻第5号(1926)）
>
> 牛津与康橋、誰都知道這是世界著名的英国両大学区。就是在国内、因為一些留学生的介紹、大家也早印入了這両個名詞。（N.T.「牛津・康橋」『新光』第9期(1934)）

「江」がCambridgeのCamの音訳に使われた例はほかの資料には見出せなかったが、「岡」は徐継畬『瀛環志略』(1848)で「岡比黎日」、黎庶昌『西洋雑志』(1900)で「岡布利直」という音訳地名に使われている。上掲の最初の例にも「岡布理智」という表記が出て来る。「康」

は『万国公報』第179冊(1903)に「康比治」、『英民史記』(1907)（6.3）に「康伯支」の形で出て来る。荒川によれば、山上万次郎著・谷鐘秀訳『最新統合外国地理』(1907)には「康歩履吉」という表記の例がある。

「江橋」「岡橋」「康橋」という部分意訳地名の発生の経緯は明らかではない。「剣橋」の「剣」がCamの音訳として適切でないと感じた中国人がそれを「江」「岡」「康」で置き換えてできたものであったかも知れない。しかし、「固有名詞＋普通名詞」の形をした複合地名の前半を音訳し、後半を意訳することは一般的であるので、「江橋」「岡橋」「康橋」もむしろその手法によって「剣橋」とは無関係に作られた可能性も十分に考えられる。現に、荒川の指摘によれば、1847年に刊行された魏源『海国図志』60巻本（および1852年刊の同書100巻本）には「干橋」という部分意訳地名が現れる。[55]

ほかに、「圜橋」という表記も見られる。

> 到了康熙時候、英吉利国又出了一個大人物。其人姓牛【＝New】名敦【＝ton】。（中略）他的母舅知道這個小孩将来必成大器、就勧他母親把他送入一個相近的圜橋府大学堂。
>
> （呉敬恒『上下古今談』(1915)）
>
> 季緒遊学英国圜橋大学畢業、現充北京工科大学兼工業専門学校教員。
>
> （王頌蔚『写礼廎遺著』(1915)序文）

「圜橋」の「圜」――標準語音はyuan2、huan2――は音訳とは考えがたく、川の名Camの意訳でもあり得ない。この「圜」はおそらく「円」、具体的には、半円アーチの建築様式を表すものであろう。すなわち、「圜橋」の考案者はCambridge大学の中を流れるケム川にかかった半円アーチ橋、もしくは、同大学の建物に多数見られる半円アーチ――に着目し、「圜橋」と意訳――2.3の用語によれば意訳2――したのではないかと筆者は想像する。[56]「圜橋」の用例はほかに『政府公報』第434号(1917)、同第848号(1918)などにも見られる。

「江橋」「岡橋」「康橋」「圜橋」のうちで最も普及したのは「康橋」で、相対的に用例が多

---

55 荒川は「干橋」とし、実際『海国図志』60巻本の表記は「干橋」に見えるが、1876年に刊行された100巻本の重刻版の表記は「千橋」に見える。これは重刻版の誤刻ではないかと思われるが、確実なことは分からない。『海国図志』の当該の記述の基礎となっている『万国地理全図集』は原本の参照が困難であるが、王錫祺編『小方壺齋輿地叢鈔 再補編』（著易堂、1897年）に収められた版における表記は「干橋」である。

もし「江橋」「岡橋」「康橋」が別の表記の改作であったとすれば、それらは「干橋」ないし「千橋」ではなく「剣橋」に基づいていると考えるのが自然であろう。「干橋」「千橋」と「江橋」「岡橋」「康橋」は出現時期が数十年も隔たっている。

56「圜橋」は北京国子監――国子監は隋から清にかけての中国各王朝の都に設けられた最高学府――を象徴的に示す表現でもある。ただし、北京国子監の「圜橋」は一般に半円アーチ橋を表すものとは説明されず、関連の有無は筆者には判断が付かない。

く、かつ、使用期間も長い。「康橋」は詩人徐志摩(1897～1931)の代表的な作品の１つ「再別康橋」(1926)（『新月月刊』第1巻第10号(1928)所載）に詠まれたことから今も中国で広く知られている。しかし、いずれの異表記も最終的に定着することはなく、「剣橋」の普及に伴って消滅した。

「剣橋」の異表記のほかに、『全地五大洲女俗通考』はOxfordの音訳地名「奥斯福」への注として、それらを意訳すれば「牛渡」になると説明している。原文における注の体裁は割り注である。

> 英国大学院中最大最古者有二所、一為奥斯福 地名即訳牛渡 大学院、創設於第九周時（中略）一為岡比立治 地名即訳岡橋 大学院、創設於第十周時。
>
> （林楽知編訳・任保羅筆述『全地五大洲女俗通考』第7集下巻(1903)）

この例は、6.3に掲げた『遊学訳編』『浙江潮』に見出される「牛津」の用例と同年のものである。「牛渡」も「岡橋」も日本資料に見られる意訳地名には一致しないが、これらの２つの地名に対して特に訳名が示されたのは「牛津」「剣橋」を意識してのことであったと思われる。同書ではほかにもウラジオストックが「浦塩斯徳」と表記され、日本語の地名表記の影響が認められる。

7　中国語の「牛津」「剣橋」をめぐる補足的考察

最後に、中国語における「牛津」「剣橋」に関わる補足的な考察３件について述べる。

7.1 『万国公報』第49次における「牛津」出現の背景

これまでの考察の限りにおいては、1893年の『万国公報』第49次の記事における「牛津」の用例（6.2）だけが、本稿で復元してきた日中の「牛津」の歴史の中で孤絶した形になっている。しかし、「牛津」を直接含まない資料にまで観察の範囲を広げることにより、その用例も実はレッグや南条につながっていることが明らかになる。

推定に基づく結論を先に述べれば、当該の翻訳記事における「牛津」は、原文の口訳者である英国人宣教師ティモシー・リチャード（李提摩太）が仏教に関心を寄せ、関連の書籍を多数購入して学習し、ついには仏教関係の著作を複数出版するに至る過程において意訳地名「牛津」を知り、それが記事の筆記役の老竹に伝えられて訳文に取り込まれたものであった。

リチャードの回想録（Richard(1916)）によれば、リチャードは中国人教化のための自身の学習の目的で1880年から1884年にかけて多額の資金を投じて大量の書籍を購入している。そ

の中には仏教関係のものも多く、Oxford大学出版局から刊行されたMüller and Nanjio(1883)（3.3）も含まれていた。また、漢訳仏典一式（大蔵経）も購入していることから考えて、回想録に言及はないものの、漢訳仏典の解題付き目録であるNanjio(1883)すなわち南条カタログ（3.3）を購入していることも確実である。

リチャードの仏教関係の著作の１つであるRichard(tr.)(1907)は、大乗仏教の教義の解説書『大乗起信論』を英訳したものである。この翻訳を楊文会（6.2）が支援したことは同書の扉における“Assisted by Mr. Yang Wên Hwui”との表示から知られるが、この英訳が行われるに至った経緯が序文に詳しく述べられている。

それによれば、リチャードは1884年南京に楊を尋ね、楊が『大乗起信論』を読んで仏教信者になったことを聞く。そして、楊の見計らいによって購入した10冊余りの仏教書が届いたときには、リチャードは深夜まで『大乗起信論』を読みふけった。そこに含まれるキリスト教的な要素に共感を覚え、興味をかき立てられたからである。ちなみに、こうした話からも、リチャードの中国語の読解や漢字に関する能力・知識が非常に高かったことが分かる。また、南条関係の資料には記述がないが、楊はミュラーにも会って話を聞いている[57]ことも序文から知られる。

序文にはさらに、リチャードがその後エジンバラの書店で、楊の出した複数の新刊書――金陵刻経処から刊行した仏教書であろう――を見ていたときのことが述べられている。そのときにたまたま目を通した東洋学者サミュエル・ビール（Samuel Beal、1825～1889）の仏教に関する著作の一節において、『大乗起信論』が翻訳の望まれる書物として言及されていたことが、リチャードが同書の翻訳を決意する直接の契機となった。[58]

その後リチャードは1891年に上海に移り、楊に再会して翻訳への協力を要請した。楊の協力を得て翻訳が一通り完了したのは1894年のことである。1893年の『万国公報』第49次に掲載された翻訳記事はまさにこの時期に書かれたものであった。

以上のように、リチャードは仏教に深い関心を抱いて学習を重ね、仏教関係の書籍を複数執筆・出版した。リチャードは「牛津」という意訳地名を、Oxford大学出版局から刊行された南条、ミュラー、レッグの著書を通して知り、また、『大乗起信論』翻訳時における楊文会との交流の中で互いに使用した――日本語と異なり中国語においては「牛津」の意訳は音声言語にも反映される――ものと推定される。このように理解することにより、『万国公報』第49次の記事における用例もレッグを源流とする「牛津」の歴史に有機的に組み込まれるこ

57 これは楊が南条をOxfordに訪ねたときのことであろう（6.2）。
58 リチャードが書店で見たビールの著作はおそらくBeal(1884)であると見られる。同書にはキリスト教が仏教に影響を与えた可能性を論じた箇所があり、そこに『大乗起信論』の話が出て来る。ただし、ビールは同書に『大乗起信論』の内容がまだきちんと吟味されていないとは書いているが、翻訳が望まれるということは書いていない。

とになる。[59] そして、英国で作られた意訳地名「牛津」の中国への伝播の過程を今一度総体として顧みれば、20世紀に入って形成された日本経由の本流たる経路とは別に、楊やリチャードの事例によって確かめ得る英国からの“直輸入”の細い経路が19世紀から存在したと言うことができる。

なお、リチャードが1891年に上海に移ったのは、上海の出版組織「同文書会」（The Society for the Diffusion of Christian and General Knowledge for the Chinese、略称S.D.K.）の設立者であり総幹事であった英国人宣教師アレクサンダー・ウィリアムソン（Alexander Williamson、1829～1890）が前年に死去し、その後任を務めるよう要請を受けたことによる（Richard(1916)）。同文書会は翌1892年「広学会」（The Christian Literature Society for China、略称C.L.S.）と改称した。[60] 両会は中国におけるキリスト教および一般知識の普及を目的とした組織であり、同文書会は『万国公報』を刊行し、そして、広学会は1916年にはOxford大学出版局の『海族志』『牛津大学実業叢書』を刊行している（6.4）。後者の２つの翻訳シリーズにおける「牛津図書公司」「牛津大学」の表示もおそらくリチャードの判断によるものであった。[61]

7.2　Oxford、Cambridgeの表記転換の逆行性

中国語における外国の地名の表記を一貫したものとするには、音声と文字の対応に関して統一を図ることのできる音訳地名によるしかない。そうした観点から19世紀以来西洋人宣教師そして中国人自身によって表記の統一に向けた努力が重ねられ――すでに6.2で言及したSheffield(1900)が表記統一の初期の試みの一例である――、その成果として「新堡（Newcastle）」「風索耳(Windsor)」「緑威（Greenwich）」「安得堤（Amsterdam）」「寛街（Broadway）」「白山（Mont Blanc）」「人島（The Isle of Man）」といった（部分）意訳地

59 意訳地名「牛津」を記事筆記役の中国人が考案したとする千葉の解釈はそれ自体としても無理がある。筆記者がわずか数行の短い記事、しかもその前置き的な補足説明のためにわざわざ音訳の慣習を避けて新しく意訳地名を作り出す動機がそもそも考えがたく、また、筆記者の個人的創作による、読者に通じるはずもない意訳地名を記事に用いるということも考えがたい。

60 それぞれの会は英国にあった同じ英語名の組織に基づいて設立されており、両国にまたがる組織の変遷と時間関係はやや複雑である。本文では英国との関係を省いて簡略に述べた。

61 これまで『万国公報』『海族志』『牛津大学実業叢書』を中国資料として扱ってきたが、それらにおける意訳地名「牛津」の使用の背景に英国人宣教師の関与があったとすれば、それらの出版物は純粋な中国資料とは見なせないことになる。

なお、リチャードは義和団の乱（1900年）の賠償金を用いて1902年に中国、西洋両様式の教育を行う山西大学堂（現山西大学の前身）を創設した際、西洋式教育を担当する部門「西学専斎」の教育主任に英国人宣教師モア・ダンカン（Moir Duncan、1861～1906、中国名敦崇礼）を任命した（Richard(1916)）。ダンカンはレッグのもとで学んだOxford大学の卒業生である（Soothill(1924)）。『海族志』『牛津大学実業叢書』の出版はレッグとダンカンの没後のことであるが、リチャードとレッグのあいだにはダンカンを介したつながりもできていた。

名は「紐卡斯爾」「温莎」「格林尼治」「阿姆斯特丹」「百老匯」「蒙布朗」のような音訳地名や「馬恩島」のような部分意訳地名に取って代わられ、社会から消えていった。

近代の相当の期間にわたる音訳表記の慣行を廃して意訳地名の標準的使用へと転換したOxfordとCambridgeの中国名はそうした地名表記法の趨向に逆行する異例の存在である。そして、その逆行を可能にしたのは中国の西学導入に決定的な役割を果たした日本語からの強い影響にほかならず、それにOxford大学出版局の書籍の刊行や辞書の輸入販売の際に用いられた表示が相乗的に作用したものと考えられる。

念のために付言すれば、音訳優先の考えによって中国語の意訳地名が減少の一途をたどったわけではない。事実として、現代中国語で用いられている意訳地名は少なくない。中には「太平洋（The Pacific Ocean）」「地中海（The Mediterranean Sea）」「紅海（The Red Sea）」「中東（Middle East）」などのように古くから日本語でも使われているものもあるが、大多数は「氷島（Iceland）」「中途島（Midway Island）」「復活節島（Easter Island）」「長島（Long Island）」「藍山（The Blue Mountains）」「少女峰（Die Jungfrau）」「死谷（Death Valley）」「塩湖城（Salt Lake City）」「黒山（Montenegro）」などのように日本語では一般に使われないものである。近代以来、国際的な交流や情報流通の増大の中で外国地名は大幅に増加し、その一部が意訳された結果として今では意訳地名の絶対数は近代よりも増えているものと見られる。

7.3　意訳地名導入時における原語の発音の扱い

中国語における意訳地名「牛津」「剣橋」の導入をめぐっては、日本人の感覚で見ると少々奇妙に感じられる事実がある。それは、中国資料では、それらの意訳地名がまだ普及していない時期にあっても、導入時にその原語における読みが示されることがほとんどなかったということである。

例外はまれにあり、6.4、6.6に挙げた一部の例では「牛津(Oxford)」「剣橋(Cambridge)」のような書き方がなされている。また、『時務報』第13～46冊(1896～1897)[62]と『実学報』第3～13冊(1897)は当該号の全記事中に現れる外来名とその原語の対照表（「中西文合璧表」「中西合璧表」）を掲げ、張伯爾原刊・山西大学堂訳書院訳『世界名人伝略』(1908)[63]は当該ページ

62『時務報』第15冊(1896)の「中西文合璧表」には「奥格司福 Oxford」の記載がある。

63 原刊書はDavid Patrick and Francis Hindes Groome(eds.) *Chambers's Biographical Dictionary: The Great of All Times and Nations* (1897)。『世界名人伝略』ではOxfordとCambridgeは「奥斯福」「坎勃列治」「坎勃治」と音訳表記されている。山西大学堂訳書院は山西大学堂で使う教科書の出版を目的としてリチャードが上海に設立した組織である。『世界名人伝略』の翻訳は同訳書院の代表を務める英国人宣教師ジョン・ダロック（John Darroch、中国名竇楽安）の統轄のもと、黄鼎、張在新、郭鳳翰らによって行われた（夏(2007)）。

の欄外に原語を示している。しかし、それらは情報の正確な伝達を意図する、意識の高い書き手による著作や翻訳に限られていた。日本語では「牛津」「剣橋」の意訳地名導入時には一般的な出版物においてもしばしば振り仮名によって原語との対応が明らかにされたが、中国資料にはそのような配慮が例外的にしか見られないのである。その結果として、中国の読者には意訳地名の原語の読みが分からなかったことになる。

日中における意訳地名「牛津」「剣橋」の性質の差（2.3）を考えれば、そのこと自体は自然な結末であるとも言える。すなわち、日本語ではそれらの地名は半意訳であり、表記は「牛津」でも発音は基本的に外来語音である。原語に即して読むことを前提としている以上、確実に読まれるためには読みを示さないわけにはいかない。他方、中国語ではOxfordを発音の面でも変換してしまうので、そもそも原語での発音は問題にならない。日本人（あるいは中国人）が「地中海」という意訳地名を覚えるのに原語の知識を必要としないのと同じことである。

とは言え、中国の読者には従前使われていた音訳地名と「牛津」「剣橋」との関係が分からなかったはずであることもまた事実である。その意味で原語の発音を無視して意訳地名を用いることの配慮不足はやはり否定できないわけであるが、その事実こそ知識ある一部の人間を悩ませていた外来地名の表記の不統一と混乱の問題の一端だったということであろう。

8　おわりに

以上、日中英の各種資料の調査に基づいて意訳地名「牛津」「剣橋」の発生とその後の消長を探ってみた。

意訳地名はそのほとんどすべてが中国で作られた。その中には日本語に借用されたものもあれば中国語でのみ使われているものものある（7.2）。例外的に日本人が作ったと容易に推定できる意訳地名で普及したものはPearl Harborを表す「真珠港」「真珠湾」とHollywoodを表す「聖林」くらいで、いずれも中国資料にはあまり現れない。[64]「牛津」と「剣橋」の

64 中国語では一般にPearl Harborは意訳地名「珍珠港」、Hollywoodは音訳地名「好莱坞」によって表される。「珍珠港」はおそらく日本語の「真珠港」に基づく翻訳借用であろう。

「聖林」が樹木の種類の名であるhollyを形容詞のholyと取り違えた誤訳の産物であることについてはつとに指摘がある。「真珠湾」についても、原(2006)はそれが港を表すharborを「湾」とした誤訳だと主張する。しかし、それはharborの一般的な訳語にとらわれた皮相な解釈であろう。日本は19世紀からPearl Harborをアジアと米国の中間に位置し軍港に適した湾状の地形を持つ場所として注視・警戒しており――近代の書籍・雑誌・新聞にその話題は繰り返し現れる――、単なる１つの港という受け止め方ではなかった。「真珠湾」はそうした認識を背景とした翻訳――もし直訳と見なせないとすれば意訳2（2.3）――であり、「港」とすべきところを不注意によって「湾」にしてしまったということではないと思われる。新聞の同一ページで記事の見出しに「真珠軍港」、本文に「真珠湾」を使った事例もある。

以下、「真珠港」「真珠湾」と「聖林」の発生と消長に関して粗い調査に基づいて推定するところを簡

両地名は従来その起源が明らかでなかったが、本稿での調査の結果、前者は1875〜1877（明治8〜10）年ごろに英国人ジェームズ・レッグが考案したものであることが判明し、後者については1898（明治31）年までの数年間におそらく南条文雄もしくはCambridge大学に留学した日本人が考案したとの推定を得た。

各意訳地名発生後の消長の様相は本文に詳しく述べた通りで、それを短くまとめることもむずかしい。19世紀から20世紀初頭にかけての「牛津」「剣橋」の使用状況を年表の形に整理して後ろに掲げておく。

近代における日本、中国、西洋の関わりの状況・展開を考えれば、両国間における両意訳地名の普及の時間差や影響のあり方に関して本稿で述べた推測を事実が大きく外れる可能性は低いと思われる。しかし、それは調査不足ゆえの楽観に過ぎないかも知れない。「牛津」「剣橋」の歴史に関して本稿で描いたストーリーが新たな証拠の発見によって大きく書き換えられることを期待したい。

稿を閉じるに当たり、これまであえて触れずにきた１つの問題を検討しておく。それは、「牛津」と「剣橋」の発生源がそれぞれ単一だとする、本稿でも従ってきた従来の暗黙の前提が正しいという保証は実はないという問題である。

まず「牛津」について言えば、荒川(2000b)によれば、19世紀に刊行された複数の英華辞典がfordに「津」の訳語を与えていた。とすれば、異なる人間がOxfordを訳して「牛津」という同じ結果を得た、すなわち、「牛津」の発生源が複数あったとしても不思議ではない。とは言え、Oxfordを意訳する動機や意図を実際に多数の人間が持ったかと言うと、それは

単に述べる。

Pearl Harborは「真珠河港」「真珠江港」という形で日本に伝えられ、それが「真珠港」に短縮されるとともに、「真珠湾」という語も作られた。「真珠河港」と「真珠江港」は早くはそれぞれ1887（明治20）年3月16日の『読売新聞』、1896（明治29年）年1月26日の『東京朝日新聞』の記事に現れる。「真珠河港」の初出例は次の通りである。

> 布哇国のホノルヽを離るヽ事凡そ二十里程の処に一列の岩礁を以て囲みたる天然の江湾ありてこれを真珠河港と称せり。（「米布新条約」『読売新聞』1887年3月16日）

注目すべきことに、ここですでに「真珠河港」と訳しつつ湾として説明している。Pearl Harborは日本人の意識において当初から港でもあり湾でもあった。

「真珠港」と「真珠湾」の初出例はそれぞれ1897（明治30年）年6月28日の『読売新聞』、1901（明治34）年12月15日の『東京朝日新聞』の記事に見られる。（原(2006)は「真珠湾」の発生について、開戦当日（1941（昭和16）年12月8日）の新聞報道においてホワイトハウスの発表に含まれるPearl Harborを記者が誤訳したのが起源だと述べているが、断片的な観察に基づく臆断に過ぎない。）「真珠港」と「真珠湾」は一時は拮抗していたが、最終的に「真珠湾」が優位に立った。そして、終戦後に定められた“外国の地名は仮名書きにする”という原則（3.6）に妨げられることなく、「真珠湾」の意訳地名はそのまま日本語に定着した。なお、中国資料にも「真珠港」は多少、「真珠湾」はわずかに出現する。

「聖林」の早い使用例は1923（大正12）年2月23日の『東京朝日新聞』の「映画界 活動噂ばなし」というコラム記事に見られる。「聖林」は戦後は上述の原則によって片仮名表記に取って代わられたが、現代の出版物にも散発的に現れる。中国資料における使用はわずかである。

定かではない。本稿で見てきた「牛津」の発生と普及の様相からすれば、現にそれが単一の起源に由来し、そこから日中両国に使用が拡大したと理解するのが自然である。

「剣橋」は「牛津」とはまた事情が異なる。Cambridgeのbridgeは平易な普通名詞であるので、Cambridgeを「～橋」と訳す考えはOxfordの意訳と異なり人々の念頭に上りやすい。実際、「～」の部分を異にする意訳なり部分意訳なりが複数の時と場において独立に行われた可能性は十分にある（4.3、6.6）。しかし、「剣橋」という特定の表記に限って言えば、やはり起源は単一と見るのが自然である。Camの音訳を「剣」の字によらなければならない理由はなく、しかも、「剣」は外来名の音訳に一般に使われる漢字でもないからである。

文献

荒川清秀(2000a)「『聖林』は『ハリウッド』、では『牛津』『剣橋』は？」『月刊しにか』第11巻第6号（大修館書店）

荒川清秀(2000b)「外国地名の意訳―『剣橋』『牛津』『聖林』『桑港』―」『文明21』第5号（愛知大学国際コミュニケーション学会）

王樹槐(1969)「清末繙訳名詞的統一問題」『中央研究院近代史研究所集刊』第1期

王力(1958)『漢語史稿』（科学出版社）

欧陽哲生編(1998)『胡適文集１』（北京大学出版社）

欧陽躍峰・姚彦琳(2012)「近代教会報刊的在華伝播―以《万国公報》為考察的中心―」『安徽師範大学学報（人文社会科学版）』第40巻第3期

夏暁虹(2007)「従"尚友録"到"名人伝略"―晩清世界人名辞典研究―」陳平原・米列娜編『近代中国的百科辞書』（北京大学出版社）

樺島忠夫(1985)「文字の教育と政策―それを考えるための方法について―」林四郎編『応用言語学講座 第３巻 社会言語学の探求』（明治書院）

寇振鋒(2009)「中国の『東方雑誌』と日本の『太陽』」『メディアと社会』第1号（名古屋大学大学院国際言語文化研究科）

周駿章(1937)「評標準漢訳外国人名地名表」『国聞週報』第14巻第18期（国聞週報社）

沈国威(1994)『近代日中語彙交流史―新漢語の生成と受容―』（笠間書院）

沈智(1987)「袁希濤与上海愛群女校」『人物』1987年第2期（総第42期）（北京市郵政局）

秦嵐(2011)「清末時期留日青年所創主要報刊及其影響」修剛編『外来詞彙対中国語言文化的影響』（天津人民出版社）

鄒振環(2012)「創辦初期的新学会社与《外国地名人名辞典》的編訳」『東方翻訳』2012年第4期（総第18期）（東方翻訳雑誌社）

千葉謙悟(2003)「地名の翻訳借用表記創造の主体をめぐって―オクスフォード『牛津』を中心に―」『東

洋学報』第85巻第1号（東洋文庫）

千葉謙悟(2006)『清末中国語と東西言語文化交流―外来語・欧米漢学・交流の現場―』早稲田大学博士論文

千葉謙悟(2010)『中国語における東西言語文化交流―近代翻訳語の創造と伝播―』（三省堂）

張振明·曹文娟(2011)「《英民史記》的訳述及其在晚清中国的意義」『斉魯学刊』2011年第2期（総第221期）（曲阜師範大学）

陳継東(1999)『楊文会研究―清末における中国仏教の復古と綜合―』東京大学博士論文

陳継東(2002)「近代仏教の夜明け―清末・明治仏教界の交流―」『思想』No.943（岩波書店）

陳継東(2003)『清末仏教の研究―楊文会を中心として―』（山喜房仏書林）

陳振蒨(1990)「外国専名漢訳初探」『広東民族学院学報（社会科学版）』1990年第2期（総第19期）

外山滋比古(2003)『わが子に伝える「絶対語感」』（飛鳥新社）

南条文雄(1884)「学窓雑録 接前」『令知会雑誌』第10号（令知会）

南条文雄(1885)「寄楊仁山書第二」『教学論集』第20編（無外書房）

南条文雄(1901)「恩師馬格師摩勒先生に関する話」『精神界』第3号（精神界発行所）

南条文雄(1906)『感想録』（井洌堂）

南条文雄(1921)「忘れ得ぬ人々」『合掌』第2巻第4号（合掌社）

南条文雄(1924)『南条文雄自叙伝』（沈石山房）

南条文雄(1927)『懐旧録』（大雄閣）

原徳三(2006)「『真珠湾』はない」『文芸春秋』第84巻第12号

潘允中(1989)『漢語詞彙史概要』（上海古籍出版社）

古田東朔・亀井孝・松島栄一・頼惟勤・柴田武・梅谷文夫・渡辺実・山田俊雄(1965)『日本語の歴史６新しい国語への歩み』（平凡社）

楊錫彭(2007)『漢語外来詞研究』（上海人民出版社）

羅常培(1950)『語言与文化』（国立北京大学）

Rudolph Ackermann(1814) *A History of the University of Oxford, Its Colleges, Halls and Public Buildings Volume I*, London: Rudolph Ackermann.

Samuel Beal(1876) *The Buddhist Tripiṭaka As It Is Known in China and Japan: A Catalogue and Compendious Report*, London: Clarke & Son.

Samuel Beal(1884) *Buddhism in China*, London: Society for Promoting Christian Knowledge.

Norman J. Girardot(2002) *The Victorian Translation of China: James Legge's Oriental Pilgrimage*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Giro Koike(1995) 'Why the "Cambridge & Oxford Society"?', A document available at the website of the Cambridge & Oxford Society.

James Legge(1893) 'A fair and dispassionate discussion of the three doctrines accepted in China: From Liû Mî, a Buddhist writer', *Transactions of the Ninth International Congress of Orientalists Volume II*, London.

F. Max Müller(1881) *Buddhist Texts from Japan (Anecdota Oxoniensia, Aryan Series Volume I, Part I)*, Oxford: Clarendon Press.

F. Max Müller(1884) *Biographical Essays*, London: Longmans, Green, and Co.

Timothy Richard(tr.)(1907) *The Awakening of Faith in the Mahayana Doctrine, The New Buddhism by the Patriarch Ashvagosha*, Shanghai: Christian Literature Society.

Timothy Richard(1916) *Forty-Five Years in China: Reminiscences*, New York: Frederick A. Stokes Company.

Devello Z. Sheffield(1900) *Western Biographical and Geographical Names in Chinese: Report of Committee on Terminology of the Educational Association of China*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press.

William E. Soothill(1924) *Timothy Richard of China: Seer, Statesman, Missionary and the Most Disinterested Adviser the Chinese Ever Had*, London: Seeley, Service & Co.

追記　中国の出版物における「牛津」の初出例ほか

本稿入稿後、中国の出版物における「牛津」の初出が1893年の『万国公報』第49次の翻訳記事（6.2、7.1）からさらに７年さかのぼることが判明した。

新しい初出例は1886年に刊行された『西学略述』に見出される。同書は西洋の諸学問の概要を紹介した10巻から成る翻訳書で、訳者は英国人宣教師ジョセフ・エドキンズ（Joseph Edkins、1823～1905、中国名艾約瑟）である。宗教を主題とする巻三の比較宗教学について述べた箇所で、その創始者であるミュラーに関する説明にOxford大学を表す「牛津書院」が出て来る。

> 此一学乃由英国牛津書院近年所聘較諸方言教習徳人名馬斯米勒【＝Max Müller】者之所発明。馬公素多識梵文而於較諸方言尤其深嗜。
>
> （赫徳(Robert Hart)撰・艾約瑟訳『西学略述』巻三「較諸教同異」(1886)）

この用例の存在の確認により、19世紀、すなわち、日本への留学生が「牛津」を伝える以前の時期の中国において、楊文会とリチャードの２人に加えてエドキンズもその意訳地名を知り使用していたことになる。エドキンズにはリチャードと同じく仏教関係の著作があり――*Religion in China* (1878)、*Chinese Buddhism* (1880)など――、そこにはミュラーの研究への言及もある。エドキンズもOxford大学出版局から刊行された南条やミュラーの著作をおそらく入手していたであろう。なお、英国人の翻訳

による『西学略述』は定義上中国資料ではないが、『万国公報』第49次の記事や『海族志』『牛津大学実業叢書』にならって年表の中国資料の欄に記載する。もし英国人の関与したものを中国資料から除外するとすれば、中国資料における「牛津」の出版初出は1903年4月に刊行された『遊学訳編』第6冊（6.3）ということになる（『浙江潮』第10期は同年12月刊）。

このほか、于宝軒編『皇朝蓄艾文編』80巻(1902)に収められた記事の３件に「牛津」の用例が見出された。うち２件にはリチャードが関わっており、巻六十五に収められた李提摩太訳・蔡爾康述「英前相格蘭斯敦【＝Gladstone】小伝」(1898)がその１つである。また、巻十六に収められた「日華学堂章程要覧」(1899)も注目に値する。これは中国人留学生の教育のために初めて東京に設立された学校である日華学堂の学則で、その末尾に記された設立者である高楠順次郎（3.5）の名に「大英国牛津大学文芸博士」という肩書きが添えられている。留学生を通じた中国への「牛津」の伝播・普及が1903年に始まったことを本文で述べた（6.3）が、この学則はまさにその展開の背後に位置する存在であった。もっとも、学則の主たる書き手はおそらく日本人であり、いずれにせよ学則中の表記が「牛津」を広める役割を果たすことはなかったであろう。

意訳地名「牛津」「剣橋」年表

		日本資料		中国資料	備考
		Oxford	Cambridge		
「牛津」以前	1868(明治1)	［福沢諭吉 西洋事情付録 片仮名］	［同左 片仮名］	［王韜 漫遊随録「哈斯仏」］	
	1869(明治2)				
	1870(明治3)	［小幡甚三郎 西洋学校規 片仮名］	［同左 片仮名］		
	1871(明治4)		［スマイルス 西国立志編「堪比日」］		日清修好条規
	1872(明治5)	［村田文夫 洋語音訳筌「阿斯仏」］	［同左「堪比日」］		
	1873(明治6)	［和田義郎訳編 英吉利史略 片仮名］			
	1874(明治7)	［明六雑誌12「阿斯福」］ ［グリウリンヘルド 万国地誌略「阿斯仏」］			
	1875(明治8)	［藤田九二 英語和解地名字彙 片仮名］ ［田中不二麿 理事功程「阿斯仏」］	［同左 片仮名］ ［同左「堪比日」］	［王韜撰 甕牖余談「堪比日」］	
	1876(明治9)	［近藤圭造 兵要万国地理小誌「柯哥仏爾」］	［同左「岡比黎日」］	［李圭 環遊地球新録「奥克司芬」「甘比利支」］	南条文雄・笠原研寿渡英 J・レッグOxford大学着任
	1877(明治10)	［劉潮編 万国地誌要略「阿斯仏」］			
第1期	1878(明治11)	南条・笠原 書簡(僧墨遺稿)【初出】 ［マレー 竜動新繁昌記「乙屈保(土)」］		［張徳彝 四述奇「敖克斯仏」「堪卜立址」］	
	1879(明治12)	南条・笠原 書簡(僧墨遺稿) ［同 片仮名］［南条・笠原 書簡(南条先生遺芳) 片仮名、「阿斯仏」］	［末松兼澄 書簡 片仮名］[6]		南条・笠原Oxfordに移る
	1880(明治13)	［乾立夫・中原淳蔵訳 泰西名士鑑上編「阿斯仏」］	［同左「堪比日」］	楊文会 南条・笠原宛て書簡「牛津」【牛津初出】	
	1881(明治14)	南条・笠原 楊文会宛て書簡(教学論集20)	同左「曲橋」		南条 レッグを初訪問 楊文会 南条を初訪問
	1882(明治15)	南条文雄 書簡(南条先生遺芳)	笠原研寿 南条宛て書簡(教学論集5)「曲橋」		笠原帰国
	1883(明治16)	Bunyiu Nanjio *A Catalogue*【出版初出】 南条文雄 漢詩(航西詩稿)		［薛福成 出使四国日記「阿克司福」「千白雷池」］	笠原没
	1884(明治17)	南条文雄 令知会雑誌6,7(漢詩) 南条文雄 令知会雑誌8,9(論文) ［南条文雄 教学論集8「阿斯弗」］	［朝日新聞「堅不列痴」］		南条帰国
	1885(明治18)	南条文雄 梵文阿弥陀経音義両訳 南条文雄 教学論集15 ［南条文雄 令知会雑誌18 片仮名］	［同左「ケムブリヂユ」］		
	1886(明治19)	南条文雄 問対雑記 馬格師摩勒(ミュラー) 涅槃義 南条文雄 令知会雑誌23	［南条文雄 漢文(航西詩稿)「剣舞里地」］ ［同左「ケンブリヂユ」］	艾約瑟訳 西学略述3「牛津」【牛津出版初出】	
	1887(明治20)	南条文雄 印度紀行			
	1888(明治21)	南条文雄 仏教演説雄弁集 荻原善太郎 日本博士全伝	［同左「ケンブリッヂユ」］ ［同左 片仮名］		
第2期	1889(明治22)	法学協会雑誌65【一般出版初出】 国民之友62			
	1890(明治23)	南条文雄 哲学雑誌39 教育時論187			
	1891(明治24)	加藤宜利編 南条文学博士小伝	［同左「剣舞里地」］		
	1892(明治25)	南条文雄 書簡[7] 明教新誌3152			
	1893(明治26)	ダイシー 英米仏比較憲法論		万国公報49(李提摩太訳)「牛津」(千葉初出)	
	1894(明治27)	南条文雄 仏教史林1 東洋哲学1-1			日清戦争(～1895)
	1895(明治28)				
	1896(明治29)	南条文雄 仏教史林25 J. Takakusu *Buddhist Practices in India* (義浄南海寄帰内法伝)	［同左「ケンブリヂユ」］	［鄭観応 盛世危言増訂新編「教斯仏」「堪比立」］	清国からの大規模な日本留学開始
	1897(明治30)	南条文雄 仏教通俗講義梵文阿弥陀経 史学雑誌8-6 帝国文学3-9		［万国分類時務大成20「阿克司仏得」「看伯理治」］ ［訳書公会報2「堪白里治」「堪白来治」］ ［集成報7(官書局報)「千布泥」］	
	1898(明治31)	世界之日本26 国学院雑誌4-10 ［南条文雄 東洋哲学1「阿斯仏」］	東洋学芸雑誌200【初出】	于宝軒編 皇朝蓄艾文編65(李提摩太訳)「牛津」 ［周家禄 家塾答問「敖斯仏」「堪比立」］	
	1899(明治32)	教育公報227 教育時論521 東京独立雑誌25,26	［同左 片仮名］ 同左「賢橋」		
	1900(明治33)	読売新聞(ミュラー追悼文)【新聞初出】 帝国文学6-3 東京経済雑誌1024(競艇)	憲政党党報4-42 同左 同左	［黎庶昌 西洋雑志「坳克司付爾」「岡布利直」］	M・ミュラー没

第3期	1901(明治34)	南条文雄 精神界3 東京朝日新聞(ミュラー訃報) 児童研究4-1(競艇)	同左【南条初出】 高楠順次郎 東洋学芸雑誌237 同左	[広学類編3「奥斯福」] [斯密亜丹 原富(アダム・スミス 国富論)「鄂斯福」]	
	1902(明治35)	南条文雄 漢詩 精神界2-1 細野猪太郎 東京の過去及将来 慶応義塾学報54,57	同左 [読売新聞「剣摺」]	[遊学訳編2「奥克司火爾特」] [新民叢報3「琴布列」]	日英同盟(～1923)
	1903(明治36)	南条文雄 和訳梵文妙法蓮華経 島文次郎 英国戯曲略史 島村抱月 渡英滞英日記	同左 同左「建橋」 学灯7-10	遊学訳編6「牛津」 浙江潮10「牛津」【牛津普及開始】 [甄克思 社会通詮「鄂斯福」] [万国公報175「阿司仏徳」「堪貝支」] [新学大叢書81「根補尼」]	
	1904(明治37)	東京朝日新聞(競艇)【新聞運動初出】 近角常観 信仰問題 横山達三 日本近世教育史	同左【新聞初出】 同左「曲橋」	新学会社編訳 外国地名人名辞典「牛津」(荒川初出) 万国広報188「牛津」[同179「康比治」] [康有為 牛津剣橋大学遊記「悪士弗」「監布烈住」]	
	1905(明治38)	神戸弥作 外国地理 絵画叢誌224 読売新聞「乙津」	同左「犬橋」	大陸3-7「剣橋」【剣橋初出】	
	1906(明治39)	里見純吉 巨人之片影 明星 午歳第9号 教育時論768	末松謙澄 夏の夢日本の面影 山室軍平 ブース大将伝 教育時論769	学部官報2「牛津」 [同「開柏来治」]	
	1907(明治40)	ミユーレル(ミュラー) 比較宗教学 羅馬字ひろめ会 国字問題論集 浅野和三郎 英文学史	松浦政泰編 世界遊戯法大全 教育雑誌809 同左	葛耳雲 英民史記「牛津」 [同「康伯支」] 商務官報23「牛津」「剣橋」	
	1908(明治41)	南条文雄 静思録 南条文雄 仏説無量寿経阿弥陀経 長沢亀之助 問題解法三角法辞典	同左 同左 運動世界5	[張伯爾 世界名人伝略「奥斯福」「坎勃(列)治」]	
	1909(明治42)	エヂアトン 英国殖民発展史 林董纂訳 修養の模範 桜井彦一郎 欧洲見物	長沢亀之助 解法適用算術辞典 桧垣冬五郎 成功模範録 薬学雑誌328「賢橋」	新世紀105「牛津」	
	1910(明治43)	掘切善兵衛 殖民と経済 冒険世界3-3 国際法雑誌8-10	同左 同左 大庭柯公 人物分布観	東方雑誌7-8「牛津」 教育雑誌2-10「牛津」「剣橋」	
	1911(明治44)	ブリュール 剣橋大学と学生 黒板勝美 西遊二年欧米文明記 慶応義塾学報168	同左 同左 東洋時論2-4	陸費達 世界教育状況「牛津」 東方雑誌8-8「剣橋」 普通百科新大詞典「江橋」	辛亥革命(～1912)
	1912(大正1)	生江孝之 欧米視察細民と救済 小西重直 現今教育の研究 大日本文明協会 近世泰西英傑伝	同左 鵜崎熊吉 朝野の五大閥 古林亀治郎 現代人名辞典	勃拉斯 平民政治「牛津」「剣橋」[同「岡比黎日」]	
	1913(大正2)	稲垣陽一郎 牛津近代の三名士 時事通信社 代表的人物及事業 太陽19-12	同左 同左 同左	進歩4-6「岡橋」 [康有為 中華民国憲法草案「悪士弗」「検布烈住」]	
	1914(大正3)	南条文雄 向上論 内ケ崎作三郎 近代文芸之背景 厨川白村 文芸思潮論	同左 同左 芸文5-11	甲寅雑誌1-4「牛津」「剣橋」	第一次世界大戦(～1918)
	1915(大正4)	徳富猪一郎 世界の変局 戸川秋骨 英国近代傑作集 勝田主計 黒雲白雨	国家学会雑誌29-6 台湾時報68 (荒川 初出)	大中華1-3「牛津」[同「岡比黎日」] 民権基8「牛津」 教育雑誌7-2「牛津」「剣橋」	
	1916(大正5)			海族志各巻「牛津」 牛津大学実業叢書各巻「牛津」 東方雑誌13-4「牛津」「剣橋」	
	1917(大正6)	(荒川 初出)			
	1918(大正7)			新青年4-3「剣橋」 新青年4-4「康橋」	
	中略				
	1924(大正13)			(荒川 剣橋初出)	

凡例・注

1) この年表には、明治期から大正期初頭にかけての Oxford、Cambridge の意訳地名の使用例をその出典とともに示す。ただし、日本資料に現れる「牛津」「剣橋」の表記の用例に関しては出典だけを示す。
2) 片仮名表記の地名と音訳地名の出現を［ ］に入れて示す。これは意訳地名の使用開始前から Oxford、Cambridge の地名が使われていたことを示すのが主目的である。片仮名表記の地名は原則として単に「片仮名」として示す。
3) 左端の縦書きの列は意訳地名「牛津」の日本資料における使用状況に基づく時期区分（本文3.3～3.5）を示す。
4) 同一年に多数の用例がある場合は3件程度を選んで示す。同一の雑誌・新聞については初出例を優先的に示す。
5) 中国資料における音訳地名の用例は原則として荒川、千葉各氏による記述との重複を避けて示す。
6) 末松謙澄書簡は次の書籍に収められたものによる。1879年から1883年にかけての多数の書簡に片仮名表記（「ケンブリツヂ」「ケンブリツジ」）の用例が見られる。
伊藤博文関係文書研究会編『伊藤博文関係文書 五』（塙書房、1977年）
7) 1892年の南条文雄書簡は次の論文に収められたものによる。
白須浄真「明治仏教学・仏教史学胎動期の一こま―南条文雄が藤井宣正に宛てた5通の書簡―」『広島安芸女子大学研究紀要』創刊号（2000年）

参考　日本語用例の現代語訳

近代期の日本語の表現や表記に慣れていない外国人読者による理解の便宜のために、本文に掲げた用例・引用に読みを補うとともに、その現代語訳を示す。ただし、読みも意味も明らかな短い用例は省く。

3.2 「牛津」の発生　ジェームズ・レッグ――1875～1877（明治8～10）年ごろ

因みにオクス、フオルドと云地名を牛津と義訳したのはレツグ博士でありた。　（南条 (1901)）
《現代語訳》ちなみに、オックス・フォードという地名を「牛津」と意訳したのはレッグ博士であった。

3.3　第 1 期　南条文雄・笠原研寿の個人領域での使用――1878～1888（明治11～21）年

扨私共モ今暫クセバソロ〳〵「サンスクリツト」語学ヲ始メ度候得共好師ニ乏シ。字引モ文典モアレドモ皆不十分ナリ。倫敦大学校ニハ「サンスクリツト」学科ハアレドモ学ブ者今ノ処テハナシ。牛津大学校ニハ比較語言学博士マクス、ムユーラル氏モ居リ学ブ者モアル由。独逸国ニハ「サンスクリツト」語文学ハ英国ヨリハ開ケ居ル由ナリ。マクス、ムユーラル氏モ独逸人ナリ。（南条・笠原書簡、1878 年 3 月 6 日）
《現代語訳》さて私たちももうしばらくすればそろそろサンスクリット語の学習を始めたいのですが、よい先生があまりいません。辞書も文法書もありますがどれも不十分です。ロンドン大学にはサンスクリット学科はありますが、今のところ学ぶ人がいません。オックスフォード大学には比較言語学者のマックス・ミュラー博士もいて学ぶ人もいるという話です。ドイツではサンスクリット文献学は英国より進んでいるとのことです。マックス・ミュラー博士もドイツ人です。

ロンドンに着いた早々から誰に遇つてもこの事【＝渡英の目的がサンスクリット語の学習であること】を話して、適当な先生の紹介を頼んでゐた。　（南条 (1927)）
《現代語訳》ロンドンに着いた直後の時期から誰に会ってもこのことを話し、適当な先生の紹介を頼んでいた。

本月上旬文雄ハ牛津ニ到リマクス、ムユーラル氏ニ面会シ梵語伝習ノ事ヲ依頼セシニ、同氏モ仏教僧徒ノ「サンスクリツト」ヲ学バントスルハ至当ノコトナレバ何分ニモ力ノ及ブ丈ハ世話致スベシ、三年間勉強セバ随分ノ梵学者ニ仕立テ、見セルト日本公使ニモ話セト云ヒ居ラレタリ。
（南条・笠原書簡、1879 年 2 月下旬）
《現代語訳》今月上旬文雄（私）はオックスフォードに行ってマックス・ミュラー博士に面会し、サンスクリット語学習のことをお願いしたところ、同博士も「仏教僧がサンスクリット語を学ぼうとするのは至極適切なことだから何としても力の及ぶ限り世話をしよう。3 年間勉強すれば立派なサンスクリット学者に仕立ててみせる。日本公使にもそう話しなさい。」とおっしゃっていました。

当地留学生ノ演説ハ追々盛ニ相成リ二月ヨリハ文雄同会ノ書記ニ撰バレタレドモ其次会ニ於テ之ヲ辞セリ。此ハ牛津ニ移レル故ナリ。　（同上）
《現代語訳》当地の留学生の演説は時とともに盛んになり、2 月から文雄（私）は同会の書記に選ばれましたが、その次の会のときに辞任しました。これは（私が）オックスフォードに移ったためです。

明治十三年ノ冬亡友笠原研寿子余ト同ク英国牛津ニ在リ仏涅槃年代考一篇ヲ草シ
（南条文雄「仏涅槃年代考第二」『令知会雑誌』第 8 号 (1884)）
《現代語訳》明治 13 年の冬、今は亡き友人笠原研寿君は私と同じく英国オックスフォードにいて「仏涅槃年代考」という一編の論文を書き～

十三年九月余倫敦ニ在リ日々印度省書籍館ニ行キ其所有タル本邦黄檗版ノ大蔵経ヲ閲読シ増補英訳大明三蔵聖教目録ヲ草セシヲ去年二月牛津大学校印書局ニ於テ刊行セシコトアリ。　（同上）
《現代語訳》（明治）13 年 9 月私はロンドンにいて毎日のようにインド省図書館に行き、そこに所蔵され

ている日本の『黄檗版大蔵経』を閲読して『増補英訳大明三蔵聖教目録』を執筆したのを去年2月オックスフォード大学出版局から刊行したことがあった。

今年一月尽日余英ノ牛津ニ在リテ之ヲ英語ニ訳シ博士マクスムユーラル氏ニ示セシニ同氏ハ之ヲ一雑誌ニ投ゼシコトアリ。（同上）
《現代語訳》今年の1月末日私は英国のオックスフォードでこれを英語に訳しマックス・ミュラー博士に見せたところ、同博士はこれをある雑誌に投稿したことがあった。

金剛経ノ梵本（中略）我明治十四年牛津府ニ於テ刊行ス。
（南条文雄「欧洲梵語学略史」『令知会雑誌』第9号(1884)）
《現代語訳》金剛経のサンスクリット語本（中略）私は明治14年にオックスフォードで刊行した。

明治十四年六月博士馬格師摩勒【= Max Müller】氏笠原と余とを携へて牛津を去り
（エフ・マクス・ミユーラル「笠原研寿」『教学論集』第5編(1884)、南条文雄付記）
《現代語訳》明治14年6月マックス・ミュラー博士は笠原と私を伴ってオックスフォードを離れ～

明治十二年二月の末に同府【=ロンドン】を去り西北六十英里に在る牛津府に到り専ら梵語文学を学習す。
（南条文雄『問対雑記』(1886)）
《現代語訳》明治12年2月の末にロンドンを離れて西北60マイルにあるオックスフォードに移り、サンスクリット文献学を専門に学習した。

英国牛津大学校ニ属スル「クラレンドン」印書局ハ其新刊ノ梵本ヲ余ニ送致セリ。
（南条文雄「新書籍英清ヨリ来ル」『令知会雑誌』第23号(1886)）
《現代語訳》英国オックスフォード大学に属するクラレンドン出版局はその新刊のサンスクリット語書籍を私に送ってきた。

此ノ書ハ著者自ラ本文ノ始ニ述ルカ如ク英国牛津ノ梵学博士マクス、ムユーラル氏（中略）カフランシス、バルハム【= Francis Barham】氏ノ駁論ニ対ヘテ新聞紙ニ投載シタル者ニシテ
（馬格師摩勒著・南条文雄閲・加藤正廓訳『涅槃義』(1886)）
《現代語訳》本書は著者自身が本文冒頭で述べているように、英国オックスフォード大学のサンスクリット学者マックス・ミュラー博士（中略）がフランシス・バルハム氏の反論に応えて新聞に投稿・掲載したものであり～

明治十四年八月英国牛津ニ在テ書ス。
（笠原研寿「達摩波陀ノ事」『教学論集』第33編(1886)、論文表題への添書き）
《現代語訳》明治14年8月英国オックスフォードで記す。

3.4　第２期　学術界全般への使用拡大――1889～1899（明治22～32）年

在英会員植村学士牛津に遊はれたる節該論文一部を見出され
（「牛津大学懸賞論文」『法学協会雑誌』第65号(1889)）
《現代語訳》在英会員植村学士がオックスフォードに遊学なさったときにこの論文をお見付けになり～

此書ハ南条文雄氏ガ英国牛津大学校印書局ニ於テ得ラレタルモノナルヲ明治十八年始メテ本邦ニテ刊行シタルモノナリ。（「教育家秘蔵品蒐集会陳列品説明」『教育時論』第187号付録(1890)）
《現代語訳》本書は南条文雄氏が英国オックスフォード大学出版局で入手なさったものを明治18年に初めて我が国で刊行したものである。

其一部分は、既に昨年十一月牛津のクラレンドン商社より出版し、猶続々出版せられつゝありといふ。

（「欧州近世歴史地図の出版」『史学雑誌』第 8 編第 6 号 (1897)）
《現代語訳》その一部はすでに昨年 11 月オックスフォード大学のクラレンドンプレスより出版し、今も続々と出版されているという。

牛津大学のグレンフエル、ハントの二氏、（中略）昔オクシュリンヒヨスと呼べる旧址に、古物探掘を試みて、紀元一世紀乃至三世紀の古写本数多を発見したるなかに
（「基督の訓誡」『帝国文学』第 3 巻第 9 号 (1897)）
《現代語訳》オックスフォード大学のグレンフェル、ハントの２氏が（中略）昔オクシリンコスと呼んでいた遺跡で古代の遺物の発掘を試みて、紀元１世紀ないし３世紀の古写本を多数発見した中に～

ジヨウエツト(ママ)が入り来れる時の牛津は一の大学と云ふよりも、寧ろカレツヂの集れる市町とも云ふべく、各々其特異の光彩を放ちて　（安知生「牛津の哲人、ジヨウエツト」『世界之日本』第 26 号 (1898)）
《現代語訳》ジョウエットが入って来たときのオックスフォードは１つの大学と言うよりも、むしろカレッジの集まった町とでも言えるような状態で、それぞれのカレッジが独特の光彩を放って～

法王クレメント五世は欧州の四大学、巴里、ボローギヤ、サラマンカ、牛津に希伯来【＝ヘブライ】、亜剌比亜語の二講座を置きて　（金沢庄三郎「言語学小史」『国学院雑誌』第 4 巻第 10 号 (1898)）
《現代語訳》法王クレメント５世は欧州の４大学、パリ、ボローニャ、サラマンカ、オックスフォードにヘブライ語とアラビア語の２講座を置いて～

英国の大将ウオルスリー子爵は（中略）牛津大学生徒に向て（中略）演説をなせしや乍ち大なる輿論の非難を其の一身に来せり。　（「武人の政談」『国民之友』第 62 号 (1889)）
《現代語訳》英国の大将ウォルスリー子爵は（中略）オックスフォード大学の学生に向って（中略）演説を行ったところ、たちまち大きな世論の非難を一身に浴びることになった。

米国エール及ハヴアート両大学生大西洋を越えて英国賢橋及牛津大学生と体育の技を闘はす。
（「かきよせ（十七）」『教育時論』第 521 号 (1899)）
《現代語訳》米国イェール、ハーバード両大学の学生が大西洋を越えて英国ケンブリッジ、オックスフォード両大学の学生とスポーツの技能を戦わせる。

3.5　第３期　一般社会への浸透――1900～1945（明治33～昭和20）年

牛津大学と剣橋大学の端艇選手競漕は三艇身の距離にて剣橋の勝利に帰せり。
（『東京朝日新聞』1904 年 3 月 28 日）
《現代語訳》オックスフォード大学とケンブリッジ大学のボート選手競漕は３艇身の差でケンブリッジの勝利に終わった。

3.7.1　島村抱月の留学日記

四月廿五日（中略）午前好本君来ル。昨夜着津トノ事也。　（1903 年 4 月 25 日）
《現代語訳》4 月 25 日（中略）午前、好本君が来た。昨夜オックスフォードに到着したとのことである。

夕方 Dante 講義ヨリノ帰路豊崎君ヲ訪ヒ、田中君来津セバ同道案内シ呉レ玉ヘト頼ム。（1903 年 5 月 8 日）
《現代語訳》夕方 Dante の講義からの帰りに豊崎君を訪ね、田中君がオックスフォードに来たら同行して案内してくれるよう頼んだ。

九時五十分 Paddington 発にて十一時八分牛津着。　（1903 年 10 月 10 日）
《現代語訳》9 時 50 分 Paddington を出発し、11 時 8 分オックスフォードに到着。

今日午後豊崎君来ル。政友会ノ破裂ガ納マレリナドノ噂ヲ聞ク。　（1903 年 4 月 23 日）
《現代語訳》今日午後豊崎君が来た。政友会の分裂が収まったことなどの噂を聞いた。

4.2 「剣橋」の使用開始

剣橋同窓会とは英国ケムブリッヂ大学校卒業の人々の組織したる会にして
（「雑報」『東洋学芸雑誌』第 200 号 (1898)）
《現代語訳》「剣橋同窓会」とは英国ケンブリッジ大学を卒業した人々の組織した会であり～

千八百六十七年剣橋大学の美術講師となり、千八百七十二年に至りて、牛津大学の教授に任せられぬ。
（「ラスキン逝く」『帝国文学』第 6 巻第 3(1900)）
《現代語訳》1867 年ケンブリッジ大学の美術講師となり、1872 年にはオックスフォード大学の教授に任命された。

一日に挙行せられたる英国二大学の競争に於て剣橋は牛津に対し二十艇身の捷を得たるの報。
（「時事日記」『東京経済雑誌』第 1024 号 (1900)）
《現代語訳》1 日に挙行された英国 2 大学の競争においてケンブリッジはオックスフォードに対して 20 艇身差の勝利を収めたとのニュース（が届いた）。

剣橋大学にて馬博士【= Max Müller】の講義ありし時には相携へ往て之を聞き
（南条文雄「恩師馬格師摩勒先生に関する話」『精神界』第 3 号 (1901)）
《現代語訳》ケンブリッジ大学でミュラー博士の講義があったときには一緒に行ってそれを聞き～

生徒卒業後はケンブリッチ又は牛津大学に入学する者多し。　（小西重直『現今教育の研究』(1912)）
《現代語訳》卒業後はケンブリッジ大学かオックスフォード大学に入学する生徒が多い。

剣橋でもオクスフオードでも、其体育遊戯の盛んな事は予想の外で
（「剣橋学生々活」『教育時論』第 769 号 (1906)）
《現代語訳》ケンブリッジでもオックスフォードでも、スポーツ（を楽しむこと）の盛んなことは予想外のことで～

4.3 「剣橋」定着までの曲折

御序もあらば曲橋にて一寸御写取被下は至極幸ひなり。
（笠原研寿南条文雄宛て書簡 (1882)、『教学論集』第 5 編 (1884) 所収）
《現代語訳》おついでがあればケンブリッジでちょっと書き写してくだされば幸いです。

到るの日先づ曲橋大学校書籍館所蔵の倶舎註を借得て笠原の失ひし所を写し得たり。
（エフ・マクス・ミユーラル「笠原研寿」『教学論集』第 5 編 (1884)、南条文雄付記）
《現代語訳》（ケンブリッジに）到着した日、まずケンブリッジ大学図書館所蔵の『倶舎論註』を借り出して笠原の紛失した箇所を書き写すことができた。

後に建橋大学に転ぜりと云ふ。　（島文次郎『英国戯曲略史』(1903)）
《現代語訳》後にケンブリッジ大学に移ったという。

5.1 意訳地名に対する当初の否定的評価

甚しきは訓と音とを混じ、或は音と意義とを混用する者あり。例へばニージーランドを新西蘭、ケンブリツヂを剣橋、オツクスホードを牛城、トランスヴアールを虎伏波、ウラジオストツクを浦塩斯徳と為

すか如し。其他奇異なる表音字枚挙に遑あらず。
（万峰居士「東亜の大聯鎖」『憲政党党報』第 4 巻第 42 号 (1900)）

《現代語訳》はなはだしいものになると、訓読みと音読みを混ぜ、あるいは音と意味を混用するものがある。例えば、ニュージーランドを「新西蘭」、ケンブリッジを「剣橋」、オックスフォードを「牛城」、トランスヴァールを「虎伏波」、ウラジオストックを「浦塩斯徳」とするようなものである。ほかにも奇異な表音表記は挙げていけばきりがない。

釜山浦、小松山等の読み間違へも可笑いが欧米の地名を漢字で訳するのも我儕に言はすと小松山と五十歩百歩の様に思はれる。ヲツクス、フオルドを牛津、ケンブリツジを剣摺などは全然鵺然たる翻訳（?）だ。
（『読売新聞』1902 年 6 月 24 日、「茶ばなし」）

《現代語訳》朝鮮半島の地名「釜山浦」「小松山」を日本風に「かまやまうら」「こまつやま」と読むような間違いもおかしいが、欧米の地名を漢字で訳すのも我々に言わせれば「小松山」と五十歩百歩のように思われる。オックスフォードを「牛津」、ケンブリッジを「剣橋」などと書くのはまったく得体の知れない翻訳だ。

西洋の地名或は人名を書くのに漢字と片仮名とが両方使用されるが漢字の方は実に不便だ。欧羅巴をユーロープ又はオエローパと読ませるのは未だしも、牛津のオツクスフオールドは意味から来たのかは知れないが大抵の地図や歴史に堂々と書かれてあるから恐入る。（『読売新聞』1902 年 11 月 9 日、「ハガキ集」）

《現代語訳》西洋の地名や人名を書くのに漢字と片仮名の両方が使われるが、漢字のほうは実に不便だ。「欧羅巴」をヨーロッパと読ませるのはまだよいが、「牛津」と書いてオックスフォードと読ませるのは意味に基づく表記かも知れないが、たいていの地図や歴史書に堂々と書かれているから恐れ入る。

過日の貴紙二面に剣橋と書きケンブリツヂと傍訓のあつたのは真に日英同盟代表的の文字だらう。田狸【＝読売新聞記者の筆名】さん斯う云ふやうな字を知つて居るなら二ツ三ツ教へ給へ。（信州蔵六居士）【田狸による回答は省略】
（『読売新聞』1907 年 6 月 28 日、「滑稽問答」）

《現代語訳》過日の貴紙第 2 面に「剣橋」と書いて「ケンブリッジ」という振り仮名が加えてあったのはまことに日英同盟（の時世）を象徴する書き方と言えるでしょう。田狸さん、このような書き方を知っているなら 2 つ 3 つ教えてください。

5.2　両面的な意訳地名としての「牛津」「剣橋」

賭の割合は剣橋五に対する牛津の一なり。
（『読売新聞』1907 年 3 月 18 日）

《現代語訳》賭けの割合はケンブリッジ 5 に対してオックスフォード 1 である。

第九十二回剣橋、牛津両大学対抗ボートレースは多数選手を戦線に送つたので開催を危まれて居たが
（『東京朝日新聞』1940 年 3 月 4 日）

《現代語訳》第 92 回ケンブリッジ・オックスフォード両大学対抗ボートレースは多数の選手を戦線に送ったために開催を危ぶまれていたが～

8　おわりに

布哇国のホノルヽを離るゝ事凡そ二十里程の処に一列の岩礁を以て囲みたる天然の江湾ありてこれを真珠河港と称せり。
（「米布新条約」『読売新聞』1887 年 3 月 16 日）

《現代語訳》ハワイ国のホノルルから 20 マイルほど離れたところに一列の岩礁で囲まれた天然の江湾があり、これを「真珠河港」と呼んでいる。

Translated English Place Names in Japanese and Chinese: The Cases of *Oxford* and *Cambridge*

Tadaharu TANOMURA

This article is an attempt to explicate the history of '牛津' and '剣橋', semantic translations of the English place names 'Oxford' and 'Cambridge' respectively.

According to the author's survey of written records of the nineteenth century, the earliest attested instance of '牛津' appears in a personal letter sent in 1878 from London to Japan by Bunyiu Nanjio and Kenju Kasawara, both of whom were Buddhist monks dispatched to England by the Eastern Honganji Monastery, Kyoto in order to study Sanskrit Buddhist scriptures, and received personal tuition from Friedrich Max Müller, a distinguished philologist and Orientalist at the University of Oxford.

A few years later, Nanjio started using '牛津' in his publications. His practice of using '牛津' in his publications as well as in his daily life at Oxford most likely influenced other compatriot scholarly writers of various expertise. By the end of the nineteenth century, the use of '牛津' was widespread particularly in academic books and journals published in Japan.

At the turn of the century, daily newspapers in Japan started using '牛津' as well as '剣橋' in articles reporting sports competitions between the two universities. This acquainted the general public with the two translated place names, the use of which had thitherto been largely restricted to scholarly contexts.

The translated place names, used extensively in the first half of the twentieth century, almost ceased to be used after the Japanese Ministry of Education in 1946 stipulated, as one of the guidelines published along with 'The List of Kanji for Common Use', that foreign names be written with Katakana in principle.

The early stages of the history of '牛津' and '剣橋', as described above, might well lead us to expect that they were both fabricated by Nanjio or Kasawara, but this expectation is not borne out. In a recollective essay, Nanjio testifies that '牛津' was an invention by James Legge, a sinologist who was appointed the first professor of Chinese at the University of Oxford in 1876. With regard to the inventor of '剣橋', the situation is obscure, and all we can do is to speculate based on available relevant facts. The author's conjecture is that it was created by either Nanjio or an unidentified Japanese who studied at Cambridge.

The general use of '牛津' and '剣橋' in China, on the other hand, is argued to have started, after the First Sino-Japanese War (1894-1895), by the adoption of the Japanese way of writing those place names and spread to society in the first few decades of the twentieth century. Unlike in Japan, the two translated place names have survived to the present, and in fact are the sole standard ways to write and call the names of 'Oxford' and 'Cambridge' in contemporary Chinese.

Keywords: translated place names, Japanese, Chinese, 'Oxford', 'Cambridge', '牛津', '剣橋'